
空に響く歌声

麻香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空に響く歌声

【Zコード】

Z9003P

【作者名】

麻香

【あらすじ】

俺、天理 総真是野桐中学一年生

実は“能力者”、でもここでは能力者なのが普通で、街の人口の7割以上がなんかの能力をその身に宿している。だから、俺は平和で平凡な生活をしていた。

ある日突然、変な奴が転校してきた

名前は天童 美希一見、美少女で成績優秀な“完璧な娘”、なんだ
が・・・・・

とにかく、そいつのせいで非日常に巻き込まれちまった。

俺は平凡な生活が良かつたのに（泣）・・・。

第零話 プロローグ

昔話をしよう

かつて、神や精霊の子が地上に降り立つた時、世界は変わった。人の姿をして様々な力操る“それら”に、人間は到底かなわない。しかし、それらは世界を奪うのではなく共存を求めた。各国に配置された、かれらの住み家は、能力者の町とされ普通の人間と扱いが全く違つた。

人間たちは、はじめに降り立つた子供達を“天子”^{てんし}と呼んだ。

それも二千年前の話で、今は扱いも普通の人間と同じである。政治にも参加していく、そのはじめに降り立つた天子の子孫は能力者として多数存在している。

その中でも、とりわけ大きな家計を築いた者達がいた“天鬼族”^{てんじぞく}と呼ばれる彼らは翼を背に生やし、空を飛ぶ風の使者とされていた。ある者は大物の政治家や発明家や音楽家など様々なことで歴史に与している。その理由もとりわけ頭のいい血筋であり、力も強く、何よりも天子の中でも最初に降り立つた天子の一族だからである。

彼らの本家は一つあり“政を行つ天童家”^{まつりこと}と“祭り事を行つ天理家”^{てんりじや}が一族をまとめている。彼らは「七つ内まで神の内」という決まりがあり七歳の誕生日の時、天理家の境内で一晩過ごさせ、神から力、つまり翼をもらう。最近では自らそれを望まない者もいるが、皆それぞれ淡い色が付き、操れる物が変わる。しかし、500年に一度、漆黒と白銀の翼を持つ二人の天子が本家からは生まれ、他に

ない強力な力が宿される。

その二人を皆は欲し、幾多もの血が流れる時が来て、世界は乱世の匂いに満ちる

そんな子供が生まれる本家はある一つの土地に結界を張り世界との調和を保ち、暮らす。

“野桐”^{のきり} その土地はそう呼ばれていた

第零話 プロローグ（後書き）

「こんにちわ、麻香です。

「空に響く歌声」を読んで頂きありがとうございました。
これが処女作です。

若輩者であまり上手く書けないと心が痛いと思いまが、頑張つて書くのよろしくお願いします。
感想等ありましたら書いて頂けると幸いです。

第壹話 記憶の中の少女

俺が七つの時いや、正確には七歳になった夜。俺は家の境内けいだいに閉じこめられた。

とつても心細い気持ちだったことは覚えてる。

そんな中で何をして過ごしていたかも覚えてない。

でもその後はよく覚えている。

朝、夜明けと共に親父は起こしに来た。俺がなぜこんなことされなきやいけないと抗議する前に、親父は目を丸くし、俺を抱えて、とつさに母さんを呼び俺に古めかしい着物を着させられ俺は、天童家にいった。

武家屋敷のような大きな家の門にたつたときは、知らないのに懐かしい感じがした。

ゆっくり廊下を進んでいると反対側から俺ぐらい、いや、俺より小さいくらいの女の子がいた。

かわいいというより綺麗といつぱうがしつくつくるような顔立ちをしていたが、その目は獲物を見定めるかの様に鋭く、そして無表情であった。

両親に連れられ俺は大きな部屋へ来た。

中には綺麗な顔立ちの女人と、当主を絵に描いたような男の人と

さつきの女の子が一番奥に座り。ほかに20人ほどが両家の間に綺麗に並んで座っていた。

訳のわからない話し合いを大人達が続ける中、女の子は眉一つ動かさず人形のようにたたずんでいた。

そんな話も七年前の記憶である。

「ふあーねみー」

俺は天理 総真天理家の次男坊で14歳 野桐中学二年生
ただいま、あさの7時30分 登校の時間だ。
家から距離があるので朝は早い。寝不足なところを兄貴にたたきおこされた日は最悪な朝となつて、俺にネガティブさを植え付けていく。

野桐中学は能力者の育成中学トップ3にはいる能力者にとつてはすばらしい中学らしいが、全然違う。防弾制服着用で学校に行けばひとつつの基地ぐらゐの軍備がある、恐ろしい学校だ。

ただいま、8時00分ホームルームの時間だ
今ちょうど、担任の話。

「あーえーっと今日から、転校生が来た。」
一瞬にして教室がざわめいた。えー男?、女?それと能力者??
誰かが、みんなが一番聞きたいことを聞いてくれた。

そんなざわめきをお構いなしに教室のドアが勢いよく開いた。
バーン

教室中に響く、ドアの悲鳴にみんな振り返り、沈黙した。
髪の長さは腰まであり、その色は黒く、右目に前髪をかぶせ視てはいけないと主張しているようだった、そして、綺麗を通り越してし

またような白い肌に薄く青色の眼が目立つていた。しかし全く表情がなく、まるで、人形が言葉を話しているようだった。

沈黙の中に響いたその声は綺麗な声だった。

「天鬼族の天童 美希と申します。以後お見知りおきを」

教室にいた奴らの反応は一分した

一つはその美麗さに感動してゐる奴ら

二つは驚いて何も動かなくなる奴ら

後者はほとんど天鬼族だった。中にはあきれている奴もいる。

小柄な彼女を見て俺は心の中でこいつ言っていた
『二つ、知ってる気がする』

第壱話 記憶の中の少女（後書き）

第壱話を読んで頂きありがとうございました

次話は2～3週間後を田安に掲載したいと思っています

第3話 転校生の昔話

私はこの世界は苦手だ。他人も好きではない。

七歳の頃から周りは、会ったときに同じ表情カオをしていた

怒り 恐れ 増み 姦ねたみ 尊敬 同情 そして皆、私の前で頭を下げる。

「これはこれは、天子様、ご機嫌いかがですか」

いつもの愛想笑いが見える、きっと私は無表情で言葉を返しているのだろう

「変わりありません」

相手は顔色を変えて去つていった。私がいることは、ここにいらっしゃつて恐怖そのものなのだ

そんなのはいつものこと慣れていた

いつも、まじめに接してくれるのは、母 父 そして白兎はくとだけだ。白兎は私に容姿が似ているが髪は白く、私と違つて表情がある、年も16から17くらいだ。驚いたことに彼女は私の世話をらしく。

そんなの続いたのは10歳まで

月が綺麗な夜、幸せがすべて人間達によつて壊された。

血の海となつた家を覗た後、私が何をしてどうしたのかは思い出せない。

とにかく3年間死にものぐるいで生き抜いた

13歳になつてから私は家にたどり着いた。そこには白兎一人が、屋敷を綺麗に保つてゐるために、存在してゐた。というか他の家の使用人は全てあの夜に殺されている。

それから私が普通の人間に戻るまで、もとい、普通の天童家当主になるために使つた時間は、8ヶ月だ。そのうち3ヶ月はなにもしなかつた。・・・いや、できなかつた。倒れたまま3ヶ月間、目を覚まさなかつたそうだ。

今、6月中旬、野桐中学に入学することにした。稼ぎは一人分だと少ないので流石に家庭教師を雇うのは少々きつかつたのだ。で、天童家と天理家が建てたこの中学なら融通が利くという腐つた理由でここに来た。

しかも、ここなら問題が起きても一般人に知れることなく問題が解決できるしな。

『他人と一緒にいるのは気が引けるがまあ、仕方がない。それ位なら我慢ができる。』

そして、ホームルームとやらに、紹介するらしく、教室の前に待たされた。

『2年3組か』

全部で5クラスあるらしいが、こここのクラスは能力者が多いと話は聞いている。

いきなり、3組がざわめきだした。

『もういいのだろうか』

私は躊躇することなくドアを開けた

別にワクワクもしない。見渡していると、天鬼族らしい奴らが驚いている。

無理もないが、私は10歳の時に殺されていることになっている。

「天鬼族の、天童 美希と申します、以後お見知りおきを」

私は白兎に習つたとおりに告げた。口元と眉だけで笑みをつくつて普通に。

驚いたのは窓側の一一番後ろの席に、訳のわからない“氣”が満ちている奴がいた。

髪は黒く、瞳は赤く、どちらかと云うと顔立ちは整っている方だろう、私を見て周りとは全く違う反応をしている様に見えた。

『あいつ、たぶん知り合いだったのかもしれない』

私、天童美希の記憶は10歳になる前から昔はほとんど覚えていない。

第参話 美希の転校初日

転校生 天童美希が来たその日。

結局俺の後ろの席が一席分空いていて、そこに美希の机が置かれた。

一時限目 数学

教師が問題を書き終えた後、じりじりつた。

「えーと、天童さん教科書は・・・・・」

「・・・持つてません」

無表情のまま即答した

「今までどうやって勉強をしていたのですか」

「家の書物を読んで覚えていました」

「はあ・・・・」

彼女は口に手を当て、考えてからじりじつた

「その問題が答えることができたら、よいでしょうか」

立ち上ると黒板に近づき説明をしながら黒を白に埋めていき、しばらくチヨークの音が教室に響いていた

「ちなみに、ここをこうすると解りやすいです」

「天童さんそれは、まだ、教えないんだよ」

教師は焦りながらじつた

いきなり少しひくりしたような顔をした。ほとんど無表情でわかれいといが・・・

「えつ、あつ、申し訳ありません」

といつて黒板の綺麗な字を消し始めた。

「皆様、誠に申し訳ありません、どうぞ、続けてください」

丁寧なお辞儀だった。

そんなところに、割り込むようにしてチャイムが鳴る。

そんな感じで気疲れしてしまった授業が4時間終わった。

休み時間中みんなが、わんさかよってきたが、相変わらず、ほとんど無表情で、言葉を返していた。

- 昼休み -

みんな部活の昼連に行っていて教室はがら空きだった。実際は、俺と美希しかいない。

たまに他のクラスの奴が美人の彼女を見に来ていたが、もうほとんどそれもない。

俺は部活に入っていないので次の授業の準備をしていた。

次の時間は特体（特別体育授業）、戦闘訓練の様な、もとい、そのものの恐ろしい授業だ。

それも、能力者のほとんどが警察や軍人などの仕事に就いたり、普通に生きていても、結局“能力者狩り”という恐ろしいのに狙われるからなんだが・・・。授業内容があつかない。

今日は射撃訓練と能力検査だ。“射撃訓練”なんて中学校でやらないだろ普通。

だから、自分の銃を持ってきても、許されてしまうらしい。でも、校内以外の発砲禁止だし、生徒や一般市民に怪我させたら罰もある。だから校内は防弾使用の制服で過ごす訳だ。

この学校や世界では個人の能力の種類のデータがあり、強さもレベルF（無能力者）からレベルS（超能力者）まである、ちなみに俺

はこ、普通だ。能力検査はどれだけレベルが上がったかをはかるものだ。能力によって検査の仕方が変わる。

『ここにいつはどじうなんだろ』不意に聞いてみたくなった。

「なあ、君つて能力者だよなあ、レベルつていくつ位なの」席に座つたまま、後ろの席にいた彼女に聞いた。

「きいてどうするの」

態度が今までと全く違ひ、眉を寄せ、ほおづえをつき退屈そうに窓を見てつぶやいた。

「いや、別に」

「・・・しらない」 「えつ・・・」

「というか、生まれてからはかつたことない」 「だつて、国で決められて・・・」

「私は、国のルールにはほとんど、当てはまらないんだ」 意味ありげに話したその顔は呆れたような顔をしていた。つていうか、今は無表情じゃ無いんだな。

「もうすぐ、雨が降る」この言葉で話は中断、そして、元の無表情な美少女に戻っていた。

俺は立ち上がりながら「ああ、次は、第一体育館集合だ」といふと、彼女は返事をすることなく席を立つた。

ちょうど、それにあわせて小雨が降ってきた。『折りたたみ傘持つてたつけ』

下校時には晴れるだろうか。

そんな心配をしながら、第一体育館に向かおつとすると、外に出ていた奴らが戻ってきた。

そして、少し表情を見せた彼女も何事も無かつたかのようになり、もはやつたのであらう校内の地図を広げていた、やたらと広いからな、この学校。新入生が迷子になるくらいだ。

自分しか見たことないであろう光景を見れた俺は少しながら嬉しかった。

『ああ、こいつも・・普通の人みたいなところがあるんだな』と感じた瞬間だった。

第肆話 一丁の拳銃

第一体育館、射撃訓練室

今は、射撃訓練で拳銃を使って15～20メートルくらいにある的を狙うんだが、危険なためエアガン使って行っている。他には射撃部があるくらいで、この特体種目は一年に3时限くらいしかやらない。ようは、使えたほうがよくね。みたいなノリで昔の校長が許したのだ。しかも他の2时限は銃の説明で3时限目が実習なだけである。本物を持つてる奴もこの時は使っちゃいけない。

奥で見ていた美希がスッと立ち上がった、出席番号からして俺の前の番。今がそのときだ彼女は立ち位置につくことなくその場でスライドに隠れているホルスターから自前の銃を一丁取り出すと獣の様な目的を狙い撃ち、人型が無惨に頭が無くなるまで

- - - 約5秒 - -

いや、もっと早かったと思う。あれは確かに習った、ベレッタM92F・・でもグリップには双翼と十字架が施されている。しかも全体的に黒ではなく白い。詳しく知らないので説明できないが、それを二丁同時につかっていた。ものすごい発砲音と粉々になつた紙切れと下に転がっているふたつの薬莢やっけようでわかつた。こいつが持つてるのは本物だ。

彼女は黙つてホルスターに拳銃を戻し訓練室をあとにし検査室に向かっていった。皆、彼女の陰が無くなるまで、だまつてなにも喋らなかつた。

* 第一体育館 廊下*

検査というのは初めてだ何の能力かもわからない今まで平氣だらうか一週間ぶりに銃を抜いた。腕も鈍つていなさそうだ。
皆、驚いていたがまあ、べつに問題ない。

この二丁に初めてあつたのは12歳のころだ。

生きていられるのもこの二丁のおかげだ。今もこの二丁を護身用として常備している。

そう言えど、天理総真には、力の封印がかかってた。昼休みに私が何者かも気づいて無かつた。だから今まで普通に暮らしてこれたのだろう

『幸せな奴だ』まるで、正反対だな

「まつて左じやなくて右だよ・・えっと天童さん」後ろから声が聞こえた。

幸せな奴の『』登場だ。まあどうにせよ、危害を加えるのなら存在も残らないほどに

『殺してやる』

彼女は鋭い目つきで総真を見返した。しかし、それに似合わず美希の肩は小刻みに震えていた。

『なぜ、私は何も知らずに生きていけなかつたのだろう・・・・・・

第五話 廊下の雨音

俺が射撃のテストを終えて、検査室に向かった。長い廊下を雨の音だけが支配する。

『なぜ美希が銃を二丁も持っているのか』頭の中を疑問が渦巻いていた

すると前に彼女が現れた。11歳ぐらいの背の高さだが体のラインはしつかり女らしく、何よりも長い黒髪が窓の光に反射して青に光つて見えるのがどこか周りとは違うオーラをまとっていた。何だか重いものを背負つたような背中からは隙のなさがうかがえる。

彼女は分かれ道にたつて立ち往生しているようで左に歩いつとしていた

「まつて、左じゃなくて右だよ」検査の場所は右にあるぞ。

彼女は振り返ると無表情で冷たい目をしていた、後になつて黒髪が動きを追いかけるようにしてついて行き180度回転して彼女は制止する。それと同時に俺は彼女の美しさに息をのんだ。

「えつと・・・天童さん」

彼女は瞬時に青い目を俺に向けていた。彼女の感情を一気に表したような眼からは獣のよう人に人を狩る猛禽類と何かに怯えるような小動物の様に感じた。

「なんなら、案内しようか

俺はとりあえず笑顔を見せるが彼女は表情を崩さない、まるで、地獄のにらめっこみたいだ。相手から殺意がしみ出ている。

しかし、俺が歩くとついてきた。どうなんだよ、女ってわかんね

一。

「そういうえば、よく雨降るのがわかつたね。それが能力なの？」

「しらない・・・」

顔を下に向けたままそういうつてすぐに返してきた。

「・・・おまえが、そっちを聞いてくるのは意外だつたな」

「えつ」

正直驚いた、いきなり昼休みの彼女になつていたらしい。助かつた
「、「知らない」だけだったらまた黙つたままだつたからな。俺は
耐えられなかつただろ?」といつか、いきなり“おまえ”つて・・・
。

「能力を一度も測つたことがないんだつけ」

「そうだ、この世のルールに従つていしないんだ。怖くないのか」

「べつに、君が俺を殺さないんだつたら、怖くない」

すでに殺しそうな目つきなんだけど・・・。

「はつ、笑わすな。でも普通だつたら、“殺す”ではなく“壊す”
では無いのか
「・・・・どういうことだ」

「ああ、肉体面より精神面だ。人間なんて心を壊されれば生きてい
ても死んでいくと同じ。ほとんど生き地獄を味わうことになる。お
まえは、それを恐れないのか」

「生きていれば立ち直れるし、死んでから彷徨う方が俺は怖い」

自分が何言つてんだか分かなくなってきた。でも何でこいつ昼休
みからこんなに口調が違つんだ?もしかして二重人格なのか?話が
理解しにくいぞ。

「そうか、確かに幸せな奴は立ち直れると言いきれるんだな
辛そうな表情を浮かべて美希は言った

「君はどうなの」何でそんな顔をするんだ?

“世界中が自分を殺そつとするか利用しようとしてくる”それも永遠に、どう思う?」

「気が引ける。だけど、君は一人だつたのか」

「 - - - 孤独な天の歌姫そらのセイレーンそれが私の通り名だ」

「・・・・・セイレーンってなに?」

「死の歌を唄い人を惑わす妖怪みたいな物だ」 殺意を込めたような笑顔の美希

「でも、君は妖怪じやないんじやないかな」
負けじと俺は社交的な笑顔を崩さず言った。

「実はそうでもないかも知れないぞ」

彼女は悲しみの感情の中に笑みを浮かべてそういった。

これ以上聞くと、いろいろと戻れなくなりそうで俺は喋るのをやめた。

でも、それから1分には検査室に着いていた。ものすごく長い1分だった気がする。

「さつきのことは、どうか」内密によろしくお願ひします。」

無表情の彼女は起伏のない単調な声でそういうた。

ここは“天兎族専用特別検査室”・・・最先端の科学で能力測定をする場所だ。

名前の通り天兎族仕様になつてゐるらしい。世界の人口の〇・八割が天兎族だつて話だからな。

何事もなかつたように美希は扉を開けた。

それが、俺にとつて今日一日の災厄の始まりだつた気がする。

第陸話 梶の検査室

最新の機器が並ぶ検査室に入つたら、目の前の教師鳥水 梶がこちらに向かつて座りながら椅子を回すと、いきなりニヤリとしだした
「あらあら、一人つてそういう関係だったのぉ」

朱茶色のセミロングを適当に束ねた髪に、眼鏡をかけた白衣姿で行儀悪く足を組んでいた。見た目は色っぽい美人。おまけに若いので生徒に絶大な人気を誇っている。

職業は能力科の女教師で、力も強くランクはAだとか。

「断じて違います」

ちなみに、おれの遠い親戚らしく生徒と言うより弟の様な扱いで昔から会つていてプライベートで会うときは“梶姉さん”と呼んでいる

「天童美希と申します、あなたは・・なぜここに」

美希が作り笑顔をして自己紹介した。

「鳥水 梶と申します。訳があつてここで能力の制御装置の研究をしています」

あわせるようにして姉さんが丁寧に挨拶した。

「鳥水・・なら知つて当然だな」いきなり、裏の美希が出現した。

「もしかして、二人は知り合いなのか？」初対面にこの性格で美希は話さないはず・・・

「いや、一族としては知つてはいるだけで、彼女個人に会つるのは初めてだ。」

「へー」わけわかんねー

「これから世話になる、美希で良いぞ。」

「かしこまりました」「敬語もだ」 美希が完璧に怒っているのを
見て姉さんは・・。

「わかりました・・・検査の仕方は知らないですね美希さん」

何だ今のやりとり

「総真くんと一緒に特別コースが良いかしら」

「ちょっと待つて姉さん」「なんですか総真くん」

「良いのか、だつて天兎族の本家だけなんだろう」

「私は天童家本家だ。なんの問題もない」

きょとんとした顔で美希が言つ・・・へーせうだつたんだ・・・。

「せう、美希さんは事実上、天兎族の女王様と言つても良い人・
本家なのよ」

「えつ、じゃあ、天童つて・・・え・・」

政治をする天童家なのか!?でも、確か何年か前に、全滅したつて聞
いたぞ!・・・・・

「で何をする桜」

「名前でよんでもくれるのは嬉しい限りね美希ちゃん」ほつとかれま
した、俺。

「・・・・目的は」「能力の暴走の範囲を調べることが主ね・・・」
しかし、俺はなんでこんな急展開に付き合わなきやならないんだ。
無視をして美希と桜が話している間、総真は部屋の隅で頭を抱え込
んでいた。

それにしても、美希の不機嫌さが、いつ一いつに減らないんだけど

「じゃあ着替えるか」「まつて・・その隠れている総真くんを田隠
しした方が良いかもよ」

「めんどくさい、血まみれになるし」「・・・・美希ちゃん“田つ

「ぶし」と“田隠し”は違つの。まあ、わたしが見張ってるからその間に着替えて」

さらつと流したけど俺もしかしたら眼が潰されてたかも知れなかつたんだよなあ美希は発想が狂つてやがる。までよ・・・ここで着替えるのか? よやばくないかよそれ

「『めんね、総真くん・・・はここれつけて』

姉さんに渡されたのは黒いはちまきの様な布だつた。

目隠しを俺が巻いた後すぐに、しゅるしゅると衣擦れきぬれの音と共に金属が机におかれる音がした。たぶんさつきの拳銃けんじゆうだろう。

「全部『こに』置いてね、機材壊したくないし」 梶姉さんの声が近くからした。

まずいな、これ・・見えないと妙にエロいぞ・・・。

美希の服から次々と武器らしき物が机に置かれている、そんなに持つてきても学校はゆるしてゐのかよッ・・・本当におかしい学校だな警察に捕まるんじやないか?

俺が唾を飲み込むとまた梶姉さんが

「ああそこの横に置いてある着物に着替えて」と真上から聞こえた。俺はといつと検査室の机のそばに小さくづくづくまつてこるのである。今、美希は下着つてことだよな・・・。
『こに』の状況、きつにな』

～3分後～

「良いよ外すから待つて」するすると布が外された。白い寝間着(着物)の美希が恥ずかしそうにしていた。その瞬間・・・ガツン

「・・・・・痛つてーーー」「いい音したわね」
美希に問答無用でローキックを喰らって後ろの机の角に頭がぶつか
つた。桜姉さんはにこやかに見物している・・・理不尽だ。赤面し
ながら美希がそっぽを向くのと同時に姉さんがこの事件を切り上げ
た。

「そのドアあけたら中の部屋でまつてって」「・・・・・」美希は立
ち止まっている

驚いた顔をした姉さんと警戒する美希。何かに気づいたかのように
姉さんが

「ああ、大丈夫、強力な結界が張られてあるから、誰にも気づかれ
ないよ」

にこつと笑った美希はとにかく可愛かった。

・・・・・かたん・・・・・

ドアが閉まるとき桜姉さんは顔を変え独り言をつぶやいた
「・・・・・そもそも、話した方が良いかしら」

パイプ椅子を自分の席の対面に置いて。

桜姉さんは自分の椅子に座りパソコンをいじり始めた。

『そこに座りなさい、天理総真くん、・・・いいえクロノスの天子
様』

第漆話 漆黒の天子

桜姉さんはとつても真面目な顔をしていた。彼女の話した話はおとぎばなしの様だった。

「“世界の起源の物語”もう歴史で習つたかしら」眼鏡から鋭い視線が、俺に向けられる

「はい、天子と人間達の話ですよね」怖さで敬語になつた俺・・情けねえ。

「そう、天兎族の翼には色が付いてる」

「はい、現に兄貴も群青と白を掛け合わせた様な色してます」

「およそ、500年に一度、白銀と漆黒の天兎が生まれるのも知つてるわね」

俺は頷いて見せた。天兎族の昔話みたいなものだ。

「貴方の翼は」「黒色です」「なんでそつなつてると思つ?」

「烏天狗の血が混じつてるから・・・」「・・・それは、間違いよ」桜姉さんはかんぱつ入れずにいつた

なぜだ、親父も母さんも親戚もそう言つてたぞ

「・・・貴方の翼は漆黒。500年に一度の天子、クロノスの生まれ変わりよ」

淡々と話した桜姉さんの目は冷たかった。俺を無視してパソコンを

いじり始める

「美希ちゃん翼を広げて良いわよ」優しそうな声で検査中の美希に伝える。

「そして・・・これ見てみて」モニターに翼を広げた美希が映されていた。「真っ白だそれに反射して光ってる」「白銀の天子、ウラノス。またの名を天童美希」

「でも本来は白が男、黒が女らしいわ伝書によると」普通の声で姉さんは言つた

「なんで?」

「太極図たいきょくずつてわかるかしら、詳しく述べて時間なさそうだから・

・・この白と黒の勾玉が合体したみたいなの」

たくさんあるパソコンの画面の中の一につにそのままの図が映し出された
「・・・・」じらねーよそんなこと

「ともかく、黒が陰性、白が陽性でね男女に分けると、女が陰性、男が陽性になるの」

「つてことは天子は男と女一人ずつだったのか?」

「わからないわ、自分に聞いたら?」「は?」姉さんがにやりと笑つた

「伝書によると、前世の記憶が残つてゐるみたいだから、そこ空間こじ開ければわかるわよ」

「先代の天子達の記憶つて事」「ええ、まあ総真の場合女の記憶の可能性、があるから、けつこうつらうこと思つわ」「なんで?」

「あなた達の前の代のクロノスは女でそれはそれは苦しむ死に方しあつて話は本当よ」

「・・・ッなんで」

「あなた達の価値は考えられないくらい大きいわ、非力な女の方が捕まえやすかつたんでしょう」「黒は白より弱いのか?」やばいじやん・・・俺

「いいえ、力は種類が違つても対等よ、両方得意分野が違うからね、理由は女だったこと」「・・・・・・・」いくつもの想像の場面が、全部、美希の姿で頭をまわっていた。

「記憶には痛さや苦しさ感情がある、感覚がそのまま伝わってしまう。それに耐えられる精神の強さは、人間の体には無いと思つわ」

「つまり、記憶をたどるのはやめとけと」

「総真は理解が早いほうで助かるわ、そういうことと

「じゃあ、いつか捕まるんだろ、どうすればいい」「現実に目をそらさないこと」

そう言って画面の美希を指した、彼女の翼は左翼だけよく見ると小さかった。

怪我? それとも・・・姉さんの言葉がよみがえつてくる・・・まさか・・・な・・・。

『まだですか?』不機嫌そうな美希の声が聞こえる。どうやら翼を出しているのが嫌みたいだ。『ああ待つて、唄つてみてよ』明るい笑顔で花姉さんが言つ。

『死にたいのか?』

いきなり鋭い声で言つた美希は、人を殺しかねない目をしていた。

『そこ防音室だし、私たちは死なないと思つわ。保証はないけど』

『じゃあポリュヒニアにする』

『どういう歌?』なんか、美希が唄うらしい

『耳栓しなくても平気だ、普通に贊美だから酔つぱらつたみたいに

気楽になるだけよ

「『安らぎの歌かしら』『似たような物』そう言つて美希は唄い始めた
美希は何語わからぬ言葉を唄として紡ぐ

透明な美声は、空にまで届きそづなぐらじよへ響く。

みんなをいたわり安らぎを『ね』ている。

寂しい、悲しい、苦しい、辛い、怖い、痛い 何だこの声。頭に
割り込んでくるッ！

その声に俺は飲み込まれた感じがした。

綺麗な月光が映し出す姿は小さな少女、足下には無限に広がる死体
の山。

背中にある白銀の双翼が光に照らされ白く輝いていた。

しかし、彼女の着物は大量の血を浴び、紅く染まっている。

彼女の手には一降りの刀。その刃には血がこびり付いている。

涙も流さずただ月を眺めるその顔は無表情であるで精巧に造られた
人形の様だった。

その横顔がこちらを向いてくる。目は空のような青さで光り輝き右
目に真っ赤な線が走っていた。うつろに開いている目と口元だけの
笑み、白い肌に付いた鮮血は彼女が異常な存在だと世に知らしめて
いる様だった。

第捌話 銀髪の娘

「はつ・・・ウラノス、姫！やめてあげて…！」

桜姉さんの声で唄が瞬時にやんだ。

異常を感じた美希は眉間にしわを寄せ桜の見て居るであろう監視力メラを睨む。

何かを察したのか顔を青くし美希がものすごい勢いでドアを開けた
「なぜ？いや、知っていたが、これほどだつたとは」

いつの間にか美希が気を失つた総真のそばに来ていた

総真は壁にもたれ掛かる様にしていて、苦しそうな表情をしていた。

「苦しかつたが、すまない、お前に背負わす事はしてはいけなかつたのにな」

美希の哀しそうな目で言つた言葉は、総真には聞こえるはずがなかつた。

「しばらく、休ませた方が良いな、校内じゃなく静かなところが良いか・・・」

「保健室はだめなのかな？美希ちゃん」

二人は倒れた人を何人も見てきた様な冷静さで話し出した

「だめだ、休ませる理由が無い、しかも、いまのこゝのは精神的ダメージが大きすぎる」

「家に帰らせるとか？」　「どの神社？」

「ああ、天理の神社つて沢山あるんだつけ、ええと、美希ちゃんの家に一番近いところじゃないかしら」

「しょうがない、責任上私が送る。家の運び屋をよんでおくから、

桜は適当に理由付けをして置いてくれ

桜は眞面目な顔で首を縦に振った。

「わかりました。だけど、あなた達一人一緒に帰つたら間違いなく、いや、最低でも天鬼族と天狗一族の子達はいかがわしい眼で視ると思つけど」 美希はジト目で

「…………中学一年生つてそんなものなの？」 「だいたいは

桜は笑顔で答えた。

ばかばかしいと小声で言つてから美希は大きなため息をついた

「仕方ないじやあ、私はそのまま授業にでる。世話役がいるからそいつに面倒見せらる」

「わかつた、総真くんはここで迎えを待つ感じで良いのかしら？」

「それで良いだろ？ ああ、あと診断結果どうすれば良いんだ？」

「貴方の場合は、もう一つそりで良いんじやない」 「アバウトだな。でも、それだと田立つからAの方が良いんじやないか？」

「えつとね、美希ちゃん美人だし田立つのよ、下手に誤魔化すより可能性無限大つて感じにしちゃ えば的確なデータは漏れないんじやないかしら」

「…………なんか、嫌……」

「わかつたわ」 ふてくされる美希を苦笑いをして桜は眺めていた。

美希が無造作に総真に田隠しをつけたかと思うとたつた1分で着替

え終わってしまった。

拳銃をホルスターにしまつとすぐに査の電話を借りて誰かに連絡をし始めた。

「ああ、私だ、いろいろあつてな。一人天理を運んでくれないか?」

『 × * 』

「・・・・・よし“10秒”で来い」「!？」

美希が当たり前のように言つた言葉に査はあ然とした。無理もない美希の家はここから2?強はなれでいる。とても10秒でこれるはずがなかつた。

そして、きつかり10秒

- - - - バサバサツという音がしたかと思うと着物姿の娘が一人、翼を生やした狼みたいな生き物に乗つて天から降つてきた。

しかも、美希そつくり・・・。違うところと言えば髪は黒ではなく銀髪。目は綺麗な青じやなくて金色に輝いている。そして、この完璧な笑顔はたぶん美希には作れないだろう。

一番似ていな所は左の眼球の瞳孔の周りに一つの紅い線がはしつてていることだ。

外に乗つてきた生き物を置いて、校内に入る。研究室のドアをノックし、あけるとすぐに美希を見つけ、美希の目の前に来て片膝を付いている。しかし、彼女は雨のせいでズブ濡れになつっていた。

「お嬢様ただいま参りました」

軽く頷いたかと思うと美希は黙つて総真を指さした

「こちらの殿方が天理のご子息ですか?」

「ええ、そうよ」

桺が言葉を返すと血相を変え、立ち上がり美希と桺の間に自分を移動させる

「どうやら様ですか？」眉を寄せた顔は裏の美希そつくりだ
「名を訪ねるときは『』から名乗れ、白兎」美希は無表情のままで淡々と告げた。

それに、反応するよつに白兎と呼ばれた娘はピクリと動き「申し訳ありません」と即座に返してきた。

「私、天童 美希様の側近を務めさせていただいております天風白唯と申します。お嬢様には白兎と呼ばれていますどうぞよしなに」

「これはこれは」一寧に、わたしは烏水 桺。烏天狗の一族で能力制御装置を開発しているわ、よろしくね白唯ちゃん」

「・・・・・」対応に困る白兎をよそに美希は総真を指さした
「荷物はあれだから、よろしく」

「わかりました」瞬時に美希に笑顔を振りまく白兎を無視して美希は話を進める。

「丁重に運べよ、一応は漆黒の天子だ」美希は冷たい目で総真を見て、小さな舌打ちをしていた。

「では、警備はお嬢様と同じよつにさせて頂いてもよろしくでしょうか」

「わかつた、あいつらを使つても良いぞ」相変わらず無愛想な美希と愛想を振りまく白兎。

「お心遣い感謝します」と言い白兎は一礼した。

“白兎を気遣わず無表情で淡々と命令する美希”
“美希の命令には絶対逆らわず笑顔で従つ白兎”

その一人は、まるで絶対的な“縛り”があるように見えた。
血のつながりでは無く何か深い縁の様なモノで・・・。

第九話 天童家の当主

白兎の周りに浅く水溜まりができてきた。時折、ぴしゃりと水がおちる音が響く。

白兎はそれを無視して、自分の携帯をいじって誰かに連絡をしていた。

見かねた、桜が彼女にバスタオルをかけた。すると、白兎は笑顔で礼を言った。

数分後

「天理様の『ご帰宅の用意が調いました』

「よし、では私は授業に戻るぞ」

「と言つても、あと3分ぐらいで5時限目が終わつて、ホームルームと部活見学しかやること無いと思うわよ。」

「それもそつだがな、部活見学を楽しんで帰るとするか」

（美希、下校中）

部活動見学では検査結果をうにしたせいで、射撃部と文化部一部と運動部全般に体験に付き合わされかなり疲れた。

今日は迎えをあいつの護衛につけてしまったので、徒歩で帰る事にした。

何で飛ばないかといふと……少々問題が発生するからだ。まあ、飛べばすぐ着くんだがな。2?強をのんびり歩いて帰つていると、大きなやしろに着いた。

ここが、天理家本家、用はあいつの自宅と言つことになる。長つた

らししい階段が小さな山の中腹まで続いている。鳥居は階段のを合わせてつつ。説明は省かせてもらつが、天兎族にとつて“七”と言つ数字はとても重要な数字に当たるのだ。

まあ、そんなことはさておき、その上の社はとても立派な作りをしている（とっても大きい神社を想像してもらえばわかりやすいかも知れないな）。

そこでは、月に一度、会合が開かれる。天理は祭り事を率いる家だからもちろん能力的な面での話し合いになる。
これが、めんどうかいのだ、私も一応は現当主なので必ず出席する。話し合いの途中、しばらくしてから幹部の古株共が文句を言つてくるのを黙らせるのが面倒なのだ。あれは、本当に憂鬱になる。

小さなため息を漏らし、まっすぐ足を進めていく。実はここから100～200mすれば自宅なのだ。これから、夜中まで当主としての仕事に追われる羽目になる。

今日もこれから、会議が一件、事件が三件、緊急会議がさつき入ったと白兎が知らせてきた。

事件というのは、能力者が時折、犯罪に能力を使って事件を起こす。しかし、警察ではそんな“あり得ないモノ”は扱いきれなくなる。そこで、天童家に國から直接依頼されたのがこの仕事だ。だから、天童家は能力者専門の警察として会社を一つ築き上げた。それをきっかけに、幅広く企業を立ち上げ、今では國の財政のほとんどをまかなう程になってしまったのだ。

用は、当主になるとそれらの企業を取り仕切る事になり、多額の財産が得られるのだ。

だけど、天鬼族と人間は似て非なるモノだから、それ程物欲が激しいわけではない。気付いたら、こんなになつていただけで、生活に必要な物以外を買うことは滅多にないのだ。

だから、自然と金が貯まつただけの話だ。

「まあ、それを狙つてくる者は山ほど居るんだがな・・・」

そろそろ、白毛に到着する。やたらと広い武家屋敷みたいな家は寂しさが増していた。大きな門の前には白鬼が出迎えている。

「お帰りなさいませ、お疲れ様でした。主様」

「相変わらず、笑顔が上手いなお前は・・・」

そうして、彼女の転校初日は終わり、彼女の“当主”としての日常が始まる・・・。

第拾話 天理家の生活

目が覚めたら、自分の部屋にいた。

妙にリアルな悪夢を見た。夢のせいなのかは分からないが、頭が痛い。

今、ちょうど部活が終わって帰る時間帯だ。
壁掛けの時計を見て目覚める前の事を必死に思い出す

「くそつ・・・・・何時間寝てたんだ？俺は・・・・」

確か五時間目に・・・・・あんまり思い出せない。なんか、よく分からん。夢が印象に残りすぎたせいなのかも知れないな。

「とりあえず、なぜ俺は家に居るんだ！？」

考えるのが面倒になつた頃。

「・・・・まあいいや、どーでも」

鞄もあるしな。

“どれだけ深く考えてもそれ以上に深い泉に真実は存在する” なんかの本にあつた言葉だ。

俺はこの言葉が気に入つてゐる。用はあまり考え込んでも分からぬものは分からぬ。ならば、分からぬままでも構わない。つまり、無関心と言つことだ。この性格のおかげで今まで平和に暮らしてきただ。

下の階から母さんが呼んでいる。そう言えば、もう飯の時間だ。
この時間を逃したら、今日の晩飯は抜きになる。そう言つルールなんだ。

理由を加えれば親父も兄貴も天鬼族の会議とやらで出席しなければいけないからだ。

「遅いぞ、総真」兄貴が偉そうに足を組んで座っていた。

相変わらず、憎らしいなこいつは。成績も上位、ランクもA、オマケにスポーツ万能である俺の兄貴は、天理家の跡取りとなつている。俺は次男なのでそんな得点もなし。成績中の上、ランクC、運動神経が少し良いくらいで何の取り柄もない。

次男が居ると言うことは、長男にとつては嫌なことらしい。特に俺たちみたいな家系で能力を司る人間の本家はその一族をまとめる義務があるらしく。兄貴は俺にその座をとられて自分が惨めな思いをしたくないらしい・・・だから、あまり仲が良くない。

つま、俺には関係ないが・・・。だつて跡継ぎ争いなんて面倒だろ、それなら平凡に暮らしている方がよっぽど良いとは思わないか？

そんなこんなで、妙に緊張の糸が張りつめたこの食卓をいつもは嫌な気がしていたが、今日はなぜかそんな気がしない・・・。

食事を食べ終えると俺はすぐ部屋に戻つてしまつ。この家は外から見ると平屋に見えるが実は一階建てである。

それからいつものように宿題をしたりグダグダとマンガやテレビ、インターネットで暇を潰す。下の階では家にいる巫女が騒いでいる、たぶん今日もここで会議が開かれるのだろう。なぜか知らんが会議の時は2階でおとなしくしているように言われていた。

そのかわり俺は、平凡な日常を約束されているのだ。

その日はこのまま寝てしまっていたらしい、旦が覚めたら次の日の朝だった。

次の日

天気は曇天、今にも雨が降りそうだ。

家の巫女たちに傘を持たされて俺は登校した。

「ちつ・・蒸し暑ちいーな」

6月だから仕方ねーけどな

能力者の街“野桐”は都会と田舎の中間みたいなところだ。一步中心を離れたらド田舎みたいな田んぼが広がっている。
その田んぼを横切ってバスに乗つていけば野桐中学校が見えてくる。
野桐中もどちらかというとその田舎の部分だ。

「まあ、校門をくぐれば最新の教育施設なんだがな」
周りが草木に囲まれている校舎は隠れるよにしてたたずんでいた。

昼休み

あいつは、今田は一言も話しかけては来なかつた。
と言つより、能力診断でまさかのUランクをとつてしまつて、今や
校内の有名人だ。

俺なんかと話している暇もない・・・・

教室は静寂に包まれていた。今にも降りそうな雲が何となく不安を感じさせていた。

ほとんど笑顔か無表情しか周りに見せない彼女は、俺の後ろでほおづえをついて哀しそうに空を見上げていた。

何となく話しかけづらこの表情はとても優げで綺麗だった。

第拾壹話 SランクとCランク

美希が転校してきて丁度1ヶ月がすぎようとしていた頃だった。ジメジメした梅雨が終わりそうなとき、つまり6月末だ。

この学校には普通のテストだけではなく能力のテストがある。それは“筆記・実技・検査”に別れていて、この間のは検査にある。

で、次が実技なわけなんだが……。

面倒なんだなコレが。まあ、トーナメント式に対戦していくんだがこれが体育大会のお遊戯みたいな感覚ではなく、戦争ながらのマジな喧嘩とほぼ同等だから怪我人が出るのが当たり前……。

親は文句言わないかというと、能力者の家系は各家庭で誇りを持っているからしゃるので、承諾している。もちろん、実技と検査は能力者だけのイベントであって、一般生徒は筆記だけとなる。これが最低でも4試合は受けないと順位が決定しないから困る。しかし、俺の場合は天理家の恥さらしをしないようにしなければ平凡な生活が約束されないため、これだけは死にものぐいで戦うのだ。

* 第1体育館 儀式室*

その、くじ引きを行っている所だ。ランク別、学年混合で行われるので実力勝負だ。

『C - 17』 我ながらどーでも良さそうな数字をひいたものだ。

「君は、C - 17みたいだね。僕はB - 32だつたよ」

と小さな紙切れを見せるこいつは篠原 悠斗ランクはBで背は少し低め、いつも笑顔を絶やさず、クラスでは目立たないが良い奴として知られている。

まあ、俺の友達もある。

「おっ、俺はB - 25だ。天理、残念だつたな」

「なにがだ？ 勝呂」

この大柄な奴は 勝呂 啓太だ。篠原と同じようにこいつも友達である。ランクはBだが名のある武闘家の跡取りで強いのに平和主義で頼れる奴だ。クラスでも力仕事を担当している。・・・しかし、まれに自信過剰？が出てくるのが傷だな。

「お前、クール&ビューティー転校生『天童 美希』。狙つてたろ
初めから」

「何でそなうなるんだよ」「顔に書いてあるぜ。だが、あきらめる、俺の華麗な能力対戦ぶりに彼女は俺に惚れるわけ」

「あつそ、あいつは勝呂のこと気にもとめてねーと思つぞ」「篠「余裕だね天理くん」「お前まで、つんなこといつて・・・・・。

勝「そんな件の姫君は△ランクだもんな、Aランクに混ざるらしさが実力はいかほどかな」篠「まあ△だから相当能力値は高いだろうね、それと拳銃はプロ並みだつたし」

勝「ああ、早く姫君の翼の生えた姿を見てみたい」

理「美希は本^{ハキ}氣は出さないと思うぞ」

「なんでなの？、天理くん」「ん？ そんな気がするんだ、たぶんあいつには必要がない」

勝「ふーん・・・・それはともかく、さつきから天童さんのことがあいつだの美希だの、親しげに呼ぶではありませんか。天理 総真くん？」

勝呂は笑顔のまま指を鳴らし始めた。悪寒がはしつたそのとき辺りが一気にざわめいた。三人ともみんなの視線をたどつていいくと・・・

『天童 美希 A - 7』

ステージ後ろにあつたモニターに表示されたその名前は美希だつた。もう、注目の的となつていたあいつはA - 7になつたらしい。対戦は見学できるのでみんな把握しておきたかつたんだろ。

ステージから降りていく美希は無表情だつた。彼女の足音は周りの雑音にかき消され、みんな注目しているのに周りに同化しているそんな気がした。

* 放課後*

げた箱に向かうと美希にばつたり会つた。

「もう帰るのか？お前、部活は？」

しかし、美希は人形の様に眉ひとつ動かさず、げた箱から靴を取り出して完璧に無視して帰ろうとした。まるで、聞こえていないかのようだ。

さすがに、腹が立つた。無視とはビーガー事ですかねえ？（怒）

「おい、お前」

美希の肩に手をかけ無理矢理引っ張つてみた。すると、全く微動だにしない・・・。

動きは完璧に止まっているのだが、こっちがいくら力を腕にこめても逆に美希は全身で俺の方に向かないように頑張つていた。

約1分ほど力比べをしていたら、美希が俺の右手をいきなり掴んだ。

「なに？」冷たい声が響いた

一瞬にして右手をとられたまま、後方に回られた。右腕がひねられてギシギシ言いそぐなくらい力を入れられている。つ痛いんですけど（涙）

「お前は、人が声をかけているのに無視をする薄情な奴なのか？」

「おまえって誰？まさか私の事言つていいの？」 「ああそつだ」
「私は、天童 美希よ。『天理』なのに私のことが分からないの？」
美希が手の力をより強めながら、とても小さい声でいった。

「貴様はクロノスのくせにウラノスのことも分からぬのか？」

第拾貳話 疑問と帰り道

「貴様はクロノスのくせにウラノスのことも分からぬのか？」

彼女は俺の後ろでそう言った。その声は別人の様に冷たく低い声だった。

今、俺は美希に右腕をとられている。寄りかかれば折れてしまいそうな彼女の小さな腕には似合わない程の力に俺の腕が悲鳴をあげていた。俺は激痛のせいで言葉も出せない。

今度は訴えるように美希は総真に質問した。

「おまえは私のことを本当に覚えていないのか？」覚えてる？何の話だ？

「すまん……俺が美希に初めてあつたのは、美希が転校してきた日のことだ」

「そつ・・・・か・・・・」わつときは対照的に弱々しい小さな声だつた。

それと同時に美希は総真の腕をはなし、まるで人形のようにへたり込んだ。

涙を流すこともなく、ただ放心状態で動かない美希。こいつは何が言いたいんだ？

「やつぱり、お前でも駄目か・・・・」

美希は総真に聞こえないくらいの声で呟いた。

総真は美希の目線の高さまでしゃがんだ。のぞき込むと彼女の顔が険しくなっている。

「・・・・なあ、どうこう事だ？・・・・ウラノスだけ？それって何なの？」

おい！この状況でなに言つてやがる！俺！

頭を抱えながら、焦つている総真を見て。美希は呆れたようにため息をついた。

「・・・本当に、おまえの父親は何も教えなかつたんだな」そして、獣のような鋭い目つきで総真を睨んだ。彼女は起きあがり大きなため息をまたつく。総真是馬鹿にされている様で少し腹が立つてきた。

「まあいい、今日はお前の家に寄るよ」 「はあ！？」

そう言つと、美希は総真を無視して携帯を開き、電話をかけ始めた。どうやら、家族に連絡しているらしい。一通り相手に話しあつたら、電話を切つた。

「よし、帰るとするか」

と言つて、美希はさつきの事は嘘のよつて歩き始めた。

仕方なく、総真は美希について行つた。美希は総真に道も聞かず、ただ黙々と神社に足を運んでいた。道なんて聞かなくても知つていいのかのように・・・・・・

そういうえば俺、質問してから答え聞いてなくね！？

「なあ、何でおま・・・天童が俺の家に行く話になんの？」 「・・・

「美希、教えるよ」 「お前には関係の無いことだ。あと、周りに気を遣え」

辺りを見回すと、同じ学校の奴らが俺たちを傍観していた。通る奴のほとんどが振り返る、話していなければ言い訳が出来そうだが、会話をしていれば面倒になるだろう。たぶん美希はそれが言いたいのだ。

一人がじばらく無言で歩き続けると、家の鳥居が見えてきた。そこ

から、階段がずっと続いている。我ながらこんな所を毎日登つて帰宅しているのに感心するな・・・。

美希は階段を見て立ち止まつた。

「・・・はあ、面倒だなここれは」確かにおりしゃる通りです・・・。

「ちよつと、まつて」俺が歩き出さうとした時、美希は俺を引き止めた。

すると、美希は鞄から小さな笛を取り出し、口にくわえた。

彼女が吹くと甲高い音が響き、風が舞つ。

その突風に目をとじると、近くで翼が風を切る音と獸のうなり声のようない物が聞こえた。

目を開けると翼の生えた狼がそこにいた。大きさは人間より一回り大きい。

白い毛並みがフサフサとして可愛いかも知れないが機嫌を損ねたら食べられてしまいそうな圧迫感がある。瞳は緑色で額には青色の印^{ルン}みたいな物があつた。

「良い子だね、瑠璃丸は」

美希はその狼をあやす様にそう言つた。それは、いつもその年に似合わず、みんなより先を突つ走りすぎていそうな美希が見せる初めての光景だった。

美希がただの女の子にみえてくるぞ・・・。

美希の声に反応するように瑠璃丸と呼ばれた狼は喉を鳴らし、美希に顔を寄せてきた。狼の巨体が美希の背の小ささのせいによけいに立つ。

「ここ」の上まで行きたいんだ。出来るよね

彼女が頼むと、狼はふせをしながら喉を鳴らした。

美希は狼にまたがると、総真に手をさしのべた。

「空を飛ぶのは嫌いじゃないか？」

「えつ・・・・・あ・・・・・たぶん」

そういうて美希は総真を後ろに乗せて狼を走らせた。

いきなり飛び立ったのにビックリして思わず田を瞑つた。

「うわああああああ」 「あはは、なに怖がってんの？」

次第に慣れてきて田を開けると、夕田で紅く染まっている世界が田の中に飛び込んでいた風が俺達の周りをすり抜けていく。美希ははしゃぐ子供の様に笑いとても楽しそうだった。

ここつも、こんな所があるんだな・・・・。

飛びことの出来る存在“天鬼族”それなのに彼女は空を眺めることしかしない、自ら飛ぼうとしない。こんなに楽しそうなのに、彼女は翼を表すのを極端に嫌がる・・・・・。

『何故?』 最近、俺の知らないことが多すぎる気がする。

第拾參話 天理と巫女

空中散歩はそれ程長い時間では無かつた。もともと山を一つ登るだけだし、歩いても慣れている人は10分ほどで着く。

家の神社の特徴でもある七つの鳥居の中でも一番大きい七つ目の鳥居、その前で瑠璃丸は音も立てずに着地した。俺は美希より先に降りると、巫女が並んで出迎えていた。いつもは出迎えなんてしないはずなのに・・・・・。

俺が不思議に思つていると、隣に美希が静かに降りた。すると巫女達は一斉に自分の簫^{ほつせき}を構えた。

この巫女達は天理家を守るために存在する。どこから派遣されたか知らないが、皆よく働くいい人ばかりだ。いつも、俺に笑顔で話しかける彼女たちが、敵が来たように身構えていた。彼女たちの持つ簫は刀が仕込んである。どんな化け物でも斬れるように細工が施されていて、その刀は彼女たち一人ひとりの力を最大限に使えるようになつてているらしい。

天理の巫女は家事を主にしているが、剣術と魔術などに関して一通りの事は学ぶのが基本らしく、もう裏では武装巫女と呼ばれるほどになつてている。

俺は小さい頃から巫女達に育てられてきたが、彼女たちが時折見せる濁つた目と冷たい口調で話す姿が怖くてたまらなかつた。

これが、きっと彼女たちの裏の顔だと知ったのはいつからだつたらう・・・・・。

そんなことを思いながら、俺は鳥居を先にくぐつた。巫女達は構えを解き、深々と頭を下げた。

「お帰りなさいませ、総真様」

『様』扱いはよせといったのに・・・。

もどかしい感覚で総真は道の真ん中を歩き始めた。巫女達はまだお辞儀をしている。

いつもより礼儀正しくなつただけで何も変わらないじゃないか・・・。

安心してふり向くと、ちょうど美希が鳥居をくぐり出した瞬間 - - -

「 - - - 貴様、よくもぬけぬけとつ - - -」

一番鳥居のそばにいた巫女が、恐ろしい形相で美希の首筋に仕込み刀を持ってきていた。

「私が、なにかしたか?」

美希は落ち着いて質問した。明らかに裏の美希になっていた。いつもの鋭い目つきはそのままにうつろな表情で、巫女達を見下ろすような口調で話し始めた。

「総真様をたぶらかして、天理家の勢力も奪つつもりかつ - - -」

「 - - - どこの勢力を私が奪つたのだ?」

笑い混じりに美希は訳の分からぬ話を続けた。

「そもそも、こいつは一緒に来ただけで私は総史郎そうしじょうに用があるんだが・・・」

「お前の様な汚らわしい者に当主様を会わせられる分けなかろう - - -」

総史郎つてのは俺の親父の名前だ。用つてなんだ?

巫女達は徐々に美希との間隔を狭めていく・・・全員あの時みたいに濁つた目をしていた。美希は面倒くさそうに目をわずかに細めながら一瞬総真の方を視たかと思うとまたしゃべり始めた。

「私は『天童家の当主』だぞ?」「 - - - だつ・・・だから何だと いうのだ、お前のした事は私たち一族でも“最大の汚点”ではない かつ - - !」

その言葉を口にした巫女は怒りに我を忘れていたが、周りの巫女達の顔が蒼白になっていくのがはつきり見て取れた。美希が先ほどの時とは違い、明らかに怒っていたのがわかつたからなのだろう。今まで美希の裏の顔を見てきたが、いつもとは全く違っていた。

瞳がほのかに碧く輝き、この世のものとは思えない奇妙さと恐怖感を植え付ける。彼女の周りには風が起き始め、右目を隠していた前髪が舞い上がった。サラサラとした黒髪からのぞいていたその眼は左目と同様に碧く輝いていたが、その瞳孔には紅い線が走っていた。ゾッとしてしまった。そんな綺麗な瞳には表情が無く、巫女達を見下していた。

「貴様・・今、言つたな？一族の“最大の汚点”だと
静かに美希が問うと、恐怖に怯え腰が抜けてしまいそうな巫女が首を静かに縦に振った。

「だが、教えたかは知らないが、お前はあの場にいたのか？」
「否、私は頭を抱えながら社の隠れ家に身を潜めておりました」「では何故、貴様は一族のために戦おうとしなかつたのか？」
「それは、当主様の命令だつたから・・・」「・・・そうか」「では四つ目の質問だ、貴様は私のどこを見て汚点とみる」「そつ・・・」
「早く話せ」美希はにこやかな顔でせかすが、眼が笑つていなかつた。

すると、俺の後ろで何かの陰が横切つた。

「それは、総真様の前でいえないくらい凄惨なモノでした」

刃の交わる音と共に陰が姿を現す。他の巫女とは違う白く朱で飾りの付けられた巫女服、切りそろえられた長い黒髪を後ろにきっちり結い上げている。歳は俺達より少し上くらいだ、その眼は紅く澄んだ色をしていた。典型的な姫巫女と言つて良いだろう。とてつもなく

い形相で美希を睨んでいる。

いつもは笑顔の絶えない彼女の、こんな姿は初めてだった。彼女は美希に刀を振り下ろし、美希がそれに瞬時に反応して、さつき問いつめていた巫女から仕込み刀を取り上げ交戦していた。

「貴様が今の姫巫女か？」身長の低い美希が押され気味になりながら、ニヤリと笑う。

それに対しても彼女はしれっとした顔で答えた

「ええ、私は25代目“風の姫巫女”……」

「…………鳥水京華。あなたの“汚点”を歴史にほつむるため用意された、当主様の駒です」

第拾肆話 親と子

鳥水 京華は神社の姫巫女、正確には25代目の風の姫巫女になる。元々、天兎族の中でも強い力を持つ女性がなるはずなのだが、今期にはそれが現れなかつたために鳥天狗の彼女が代理を務めている。本来、風の姫巫女は舞を踊り、祈りをささげる為だけの存在であるが最近はそれだけではない。普段はと言うと親父（現当主）天理総史郎の意向により、巫女達の統率や神社の警護、時折当主の手伝いや護衛などの仕事をしている。

眞面目で明るい性格の彼女は皆に笑顔をふりまき、仕事を完璧にこなす良い人だ。

美希とは違い、特徴のないことが特徴のような顔をしている。（まあ、可愛い系の美人だけど）

だが、今は美希を嫌悪しながら刀を振り下ろしていた。殺氣にも似た張りつめた空気が一人の間を包んでいた。

「まさか、『鳥水』が姫巫女を務めるとはなあ」

美希は不吉な笑顔のまま京華を睨む。力はほぼ互角だが、完全に京華が我を失っていた。

「我が一族を侮辱するか！ 貴様は！」

とうとう、耐えかねた京華は術を使おうと美希から距離をとった。

「はい、おしまい」

その時、優しい声が響いた。京華は声の主に肩をたたかれ硬直する。美希はそれを見ると安心したように大きなため息をついた。

「遅いぞ、総史郎今までどこ行ってたんだ？」

まるで、頭の悪い犬の覚えの悪さに呆れている飼い主のような表情

で美希は親父に聞いた。

「悪かったね、美希ちゃん、仕事に行つてたんだよ」「優しい性格がよく似合う顔をしていながらその格好は十字架のペンドントをした神主というあり得ない姿をしている天理家当主は残念なことに俺の父親なのである。

「全くだ、お前は部下に来客の知らせも入れないのか？あと、ちゃんと付けするな気持ち悪い」

美希が得意の裏の顔で睨み付けても、親父は笑顔のまま京華の後ろから会話をする。

京華はと、驚いた表情のまま固まっていた。大丈夫か？あいつ・・・・・。

「『めん』めん、なんか大変な事になっちゃつてるね、美希ちゃん

「だ・か・ら、子供扱いするなあああ！」

吹っ切れたように大声を張り上げる美希に驚いて、京華が正氣を取り戻し、親父は物怖じひとつせず笑顔まで話し続ける。

「・・・昔から、美希ちゃんは責任感が強いんだねえ感心するよ」「黙れ、それはそつとこの周りの奴らをどけてくれ」

気が付くと京華と周りの巫女達が刀を美希に向けていた。

「ひひひひ、お密さんにそんな物騒な物、持ち出さないものだよ、仮にも天理家の巫女なら・・・・その方の身分に合わせてそれ相応の“おもてなし”をしてあげよつ

親父の顔は笑顔のままだが、声は低く深くどす黒い何かが見え隠れしていた。それを聞くと巫女達は武器を次々手放し距離をとつたが、警戒は解いていないようだ。

「総真様、参りましょう」俺の一一番近くにいた巫女が話しかけてきた。俺はそれを無視して巫女達の主に話しかける。

「まったく、何なんだよ親父、俺はもう家に入つて良いの？」

「ああ、いいよ、まったく総真も隅に置けないねえ」「うつせー、

馬鹿神主」

「反抗期か？」「やりと笑う親父」・・・チツ、んなわけねーだろが

「反抗期だな」今度はクスクスとしゃくに障る笑い方をする。

舌打ちと共に身を翻してさつさと歩く俺に巫女が三人ほど美希から守るような配置で付いてきた。それでも、美希の周りには巫女が三人と京華と親父がいる。

さつきのやり取りを横で見ていると嫌な気がして仕方がなかつた。

『大丈夫だよな』

そう言い聞かせて俺は長い廊下を歩いていった。

《母様！！父様！！・・・誰か居ないの！ねえ！》

廊下を人形のような少女が走る、後ろには人影が迫っていた。

《母様！・・父様！・・・・・》

母親を見つけた小さな少女は希望に眼を輝かせる。

その瞬間、鈍い音と共に母の胸の辺りから光る刃がのぞき、血がはじむ。倒れる母を目の前にして彼女は声もなく泣き叫んだ。そして、母は子と最期に話すことなく息絶える。

母の返り血を浴びた少女は怒り狂つたように目を血走らせ、冷静に生き残った敵を斬り刻んでいく。少女の周りは血の海と化していた。

その青く光る目と無表情さは敵に恐怖を植え付けながら皆殺しにしていく

次第に彼女の背中には白銀の双翼が生え左翼は真っ赤に染まつていった

そこには大量の死体と肉の破片、血の腐つたような匂いの中、少女は月を見上げながら歌い続けていた。一族に伝わる古の唄を断末魔に乗せて・・・。

【天理家・参道】

美希は首筋に刃を向けられたまま、総史郎に話しかけていた。

「反抗期とは違う気がするけどな」

総真がいなくなると同時に刀を取り出した巫女達は緊張状態で、。総史郎は、話す余裕も無かつたんだ、というといつものように笑顔で受け答える

「えー何でだ?まあ、どちらにしても美希ちゃんの所^{こせ}には変わりないわ」

「知るかつ・・・」

そっぽをむく美希はイライラしながら天理家の玄関の方に目を向けていた。

「ところで、美希ちゃんは何しにウチに来たんだい?」

総史郎は眼を細めながら低い声で美希に問う。美希は待っていたかのようにニヤリと笑う。

「・・・そろそろ”じゃないのか、もう一4になるぞ」

美希が答えると総史郎は顔に手を当て感嘆の声をもらす。

「ああ、そういう」とかっ・・・フフツ、まつたく可愛い子供にまで・・・お前らは何がしたいといつのだ。普通に、幸せに暮らすのさえ駄目だといつのか」

美希はそんな総史郎を、感情の無い普段の彼女の様な表情で視ていた。

そして、美希は低く重みのある声で呟いた。

「・・・私は幸せな生活をした覚えがないがな・・・」

それを聞いて我に返る総史郎を無視して美希が明るい声で問う。

「・・・場所を変えた方が良い、どこか借りられるか?」

「いいよ、部屋なら余ってるからね」

【天理家・屋敷内】

広々とした屋敷の中は、天理家の力の強さを表していた。神職で代々暮らしてきた天理家がここまで大きく成長したのも、天鬼族と信仰心のちからである。

幾つあるか分からぬ襖の列の奥、札が貼られた襖があった。不気味に感じるその襖を巫女達が開けても、特に変わりはなく普通の8畳ぐらいの大きさの部屋が一つあった。

「外は四重、所々六重に結界を張つてゐるな」

感心しながら部屋に入る美希に総史郎は、当たり前だよ、とだけ返した。

中には掛け軸と、いかにも高そうな壺^{つぼ}が一つ、後は座布団が敷かれているくらいだ。畳と煙の香りが充満している。

「香を焚いている・・・」嫌な顔をしながら美希は座布団に座る
「まあ一応、君は重要危険人物なわけなんだよ。好き勝手暴れても
らつては僕も困るからね」「初めて聞いたよ、私は危険人物なのか
?」

「少なくとも、遠い親戚として僕はそう思つていなければ保険があ
るに越したことはない」
「確かに、その意見は正しいな」

その言葉を聞いて安心したように総史郎は反対側に座った。

「で、用件はなにかな？」笑顔で聞いてくる総史郎に美希は答えた。

「さつき言つたはずだが？」「・・・質問してもいいかい」

「ああ、答えられる所までは」彼女の声に合わせて煙はゆらぐ

「・・・なぜ、君は総真にこだわるんだい？」「それは、対の理の
中に」

いつもと口調が違う美希に一瞬困ったような顔をした総史郎は、眼
に光の無い彼女を見て、気付いた顔をしたかと思つとまた話を続け
始めた。

「君は総真を不幸にさせたいのかい？」「・・・否、いな我はそれを
望まない」

「では、何故そつ急かす必要が？」「時が近い、『最悪の事態』に
なる」

「君としては、どうしたい」「クロノスはまだ未熟すぎる、実践は
おろか知識もない今まであつては、すぐに“飲み込まれる”

「だから、ある程度の教育が必要だと」

「・・・是ぜ、我とて最悪の事態に飲み込まれる危険性がある

「それを何故この時期にする」

「トーナメントが野桐中で開催される、それに乗じれば気付かれる
可能性は低くなる」

「では最後に、君にお願いしたい事がある、聞き届けてくれたら君
の望み通り、総真を君に預けよつ」「・・・是ええ、それが私に出来
るのならば」

「最後は自分自信で答えたね」はあ、とため息をつく総史郎に不気味な笑顔を向ける美希。

「“七つ問い合わせ”古くから伝わっていた儀式の一つだね。正確な情報をお教える為に使われた技であり、すさまじい精神集中を要する。ある天兎族が神々からの言葉として一日一回七つの問い合わせに答えたのが始まりだったっけ？」

「まあどうでも良い、私は用が済んだ。それで願いとは何だ？」

それを聞いてにっこりと笑う総史郎に美希は冷や汗をかいて顔をゆがませた

第拾陸話 髪飾りと願い

「・・・願いとは何だ？」

そう聞く総史郎はにっこりと明るい笑顔をした。

「僕も考えてはいたんだよ、君たち一人の力を弱める方法はね・・・

」小さく襖が開き、京華が顔を出す。

「コレの制作にはかなりの時間がかかったよ。だって、君たち一人の能力は相反^{あいはん}しながら同調していたんだからね」

京華は総史郎に小さな桐の箱を手渡し、静かに部屋から去つていつた。

「・・・・・ 同調？」

そんな京華の姿を睨みながらも、落ち着きながら美希は総史郎の話に耳を傾ける。

「そうだよ、だから片方が封じられていても、“もつ片方を封じなければ”意味がないんだよ」

自慢げに語る総史郎を美希は見上げ言葉を紡ぐ。

「ああ、なんだ、そんなことか・・・」

心のないその返事に総史郎は顔をゆがませた。

「・・・それなら、前から知っていた。だから私は、あの日に創造しておいた“もう一人の私”を覚醒させる事によつて、半自主的に力を封じたんだ」

まるで他人事のように咳く美希。

「やっぱり美希ちゃんは凄いね、いつも僕たちの先を行く・・・」いつも笑っている彼が見せる赤茶色の瞳は冷たく、表情はいつもより凜としていた。

「でも、君だけ安全な領域にいるのは不公平じゃないかな?」

「・・・世の中に公平などあるものか。と言いたいところだが、私はお前に約束をした。その願い、聞き届けようではないか」

「だから、君にコレをつけていてほしいんだ」

桐の箱から取り出したモノ。それは鈴の付いた白い組紐だった。

「機械じみた感じではないな」

驚いたように言う美希に総史郎は平然と答えた

「コレは古来より我が一族に伝わってきた、封じる方法の応用みたいなモノだ、学校に行くときはもちろん出来ればなるべくほどかいようにしてほしい」

「どうに結んでおくんだ?」

組紐を手に取りながら総史郎に問う美希

「腕や首・・・いや、髪に結んでもらった方が自然かな」
ではそうじみづ、といった美希は長い髪を手櫛で結い上げた。

「何も起こらないなあ」

頭を左右に揺らし、鈴を鳴らして遊ぶ美希。

「そりゃ、そのために香を焚いたんだから」

そう言って、そこら辺に漂う煙をなでるような仕草をする総史郎。

「一番最初に君は気付いたでしょ、この香は能力者の力を弱める。だから、多少力が弱まっている状態にしておける。力が弱ければ反動もすくない」

「なるほどなあ、ちなみに聞いて良いか?」

「なに? 美希ちゃん」

そこには、いつもの満点の笑顔に戻った総史郎がいた。

「制作者は誰なんだ?」

「それは・・・僕。と言いたいところだけと“鳥水 桃”だよ

もみじ

「ああ、なるほど」

美希は左田を隠している前髪を搔き上げ、むつ一方の田で氣だるもう遠くを見つめていた。

「呑ったことあるのかい？」

あいに手を当てながら考え込む総史郎。

「いや、そうじゃない。私のデータがどこで漏れたか心配しただけだ」

「それなら、全て破棄させてもらつたよ“他の家”にわたると面倒だからね」

「両家共にコレがばれると大変だからなあ
立て膝をしてため息をつく美希。行儀悪いよ、ヒーローにながら言つ総史郎は怒っているわけではなさそうだ。

「總真をこれからどうするんだい？」

「別に基本的なことしか教えないわ。あいつは鈍いからな
「ああ、分かるよ。誰に似たんだらうね」

「……お前じやないのか？」皮肉を言つ美希は楽しそうに微笑む
「僕? どうなんだろうねえ」とぼけた様な口調で総史郎は返してきた
それからしばらく、一人は含み笑いをしながら愚痴をこぼし合つて
いた。

* 数十分後*

総史郎が一呼吸置いてから少し張つた声でしゃべり出す。

「それでは、これにて本家緊急会議略式ほんけきんきゅううかいぎやくしき、締めとさせて頂きます、
この度はわざわざ足労頂きありがとうございました - - -
それに割り込むように、美希は艶のあるしつとりとした声色で続け
た。

「これからも、良き平穏が続くよう、努力して参りましょう

相手を見据える美希の容姿はやけに大人びているように見える。
れくさそうに微笑む彼女を総史郎は暖かな笑顔で見返していた。

照

番外編 天の川

「おい、総真ちょっと頼まれてくれないか？」

俺が帰ってきた矢先に親父はそう言つて笑っていた。

「珍しいな、親父が俺に頼み事なんて」

だだつ広い玄関で靴を脱ぎながら俺はそう返した。

俺の家はこの辺では結構大きい神社だ。

そして、このいつも二コ二コしている親父は神主のくせに十字架のペンダントを着けている。小さい頃なぜかと聞いてみたら、彼は困った顔をしながら。「世界に神様は沢山いるから、みんな平等にウチは扱っているんだ」と返してきた、後から巫女達に問い合わせたら「基本は天兎と天子の神々を祀っています」と言われた。

そんな話はさておき、“珍しい”と返したのは神主じゅしゅは巫女達に命令を下し、『天理家当主』としての働きをする。家事とかの些細なことでも、彼女たちが動くのが普通だったからだ。

「総真のほうが良いと思ってね」

笑顔でそう言う親父だが、コレは何かたくらんでいる時の笑顔だ。一応、親子だからそれ位分かる。だから、俺は嫌々な顔をしながら言葉を返した。

「へー、んで内容は？・・・・・」

親父から渡された地図通りに進むと、俺の家より一回りくらい大きな武家屋敷？いや極道の本家という印象の家があった。（なんか、来たことがある気がする・・・・）

そう思いつつ大きな門の端にあるインターフォンを見つけた。外が

木製になつてはいるが至つて普通のインターフォンだ。
思い切つてならじてみる・・・・・

しづらしくして声が聞こえてきた。

「どちら様でしようか」

か細くも芯のある声、たぶん女性の声だらう。

「あつ・・・えつと、天理家当主の使いで來ました」

「いじ用件は?」

「とつ、当主様への土産物だと聞いています」

親父の言われた通りに話すと門が少しづつ開いていった。

「・・・・許可が出ました。どうぞお入り下さい」

開ききつたところで中に入ると銀髪で瞳が金色の娘がいた。
歳は俺より少し上。そして、驚いたことに美希にそっくりだ。

「いじ案内いたします」

声からしてさつきの人だろう。悪意のない笑顔でいることについては、美希とは大違ひだ。

かなり大きな屋敷だが人の気配がほとんどしない・・・・・

沢山の襖だけが一つの絵を造り上げながら廊下を占領していた。
不自然に思いながら彼女に案内されると、そこは8畳ぐらいの部屋
で奥の障子が開いていた。

生ぬるくなつた風が部屋を通り抜ける。縁側に腰を下ろしたその姿
は凜としている。

着物姿の彼女は空を見上げながら呟いた。

「今年は、晴れたか」

良く通る艶っぽい声が響く。目を疑つた、あまりにも哀しい顔をし
ていたからかも知れない。（まさか、あり得ない）

“そこにいたのは紛れもなく天童美希だつた”

しかも、片方小さかつた翼は元通りになつて、時折パサパサと動かすと銀色のハネが床に落ちる。紫から群青色に変わろうとする空の色がその輝かしさを際ださせていた。

「怖い」

綺麗を通り越してそんなことを思つた。

「おい、お前誰だ？」

うつかり口に出してしまつた言葉に、彼女はすぐさま反応したものの、気にもとめずり空を見つめ続ける。

「私は、天の歌姫そら セイレーン、白銀の天子、ウラノス・・・色んな名前で呼ばれてきたけれど、一番古くて一番長い時を天童美希と呼ばれて過ごしてきたわ」

それは、まるで自分が本人ではないと主張するような口ぶりだった。「じゃあ、天童家の当主って呼ばれたことは?」

「ある、当たり前よ。今でもそつなんだから」

つまらなそうにため息をつく美希を見て俺は恐る恐る距離を縮めていく。

「へー、つてことはコレは美希への届け物だ」

渡したのは掌くらいの長方形のつつい箱。藍色のそれに銀色のリボンが装飾されている

「誰から?」

「・・・俺から」

不吉な笑顔を浮かべる親父の頼みを聞いたのはコレが理由だ。

「何故?」

「今日がたなばた7月7日だから」

リボンを解きながら彼女は言った

「お前の家には七夕に物を渡す習慣もあるの？」

冷静な顔、落ち着いた声で悪態をつく美希

「無いよ、偶然今日だつただけだよ」

あけてみるとそれは小さな黒いハネの付いたネックレスだった。

美希は少しだけ嬉しそうに微笑んでから、正気に戻り喋り出す

「鳥どもの羽など興味はない」

「あれ？ 美希は鳥天狗達の羽と漆黒の天子の羽との見分けがつかない訳ないよね？」

少々イラついたので挑戦的に返してやると

「当然だ、分かっていてわざとそう言つたんだ」

「ああ、そうですかっ！」

含み笑いをする彼女にやけくそ氣味に返す俺。まさか、さつきの口調もわざとでした？

「・・・・？ それは何だ？」

まるで、好奇心旺盛な子狐を見ている気がした・・・・・・。
彼女が指さしたのは俺の隣に置いてある風呂敷に包まれた酒瓶だ。

「コレ？」

「そう、それ！」

「親父に持たされた神酒だよ。大吟醸・・・だつけ？」

「よこせ！」「えつ？」

* 注* お酒は二十歳になつてからですよ、美希様？

「は・や・く・あ・け・ろ！！」

たぶん今、彼女に尻尾が生えていたら左右に大きく振つていただろう。

美希の輝く瞳はまっすぐ俺の手元に向いていた。

（いつもより表情豊かなのは何ですかね・・・）

俺から酒瓶を奪い取つて大事そうに抱える美希はさつきの銀髪少女

を呼んで杯さかづきを用意するように促している。

「酒は駄目なんじゃないか?」

(今日はやけにテンションの上がり下がりが激しいな・・・)

「弔じまついと祝いわむすいの席ぐら一イイじゃん、酒はそのためには在ると言つても過言じゃない」

自説によほどの自信があるのか、美希は腕を組みながら力強く首を縦に振つている。

「俺には理解さとひできん」

まあ、いいや。とこつて用意された杯に酒を注ぐ美希。

彼女が一杯飲み干す頃にはもう皿さらが落ちていた。遠くで蛙かわづの鳴く声が響く。

「・・・私はこの皿が一番嫌いだ」

追憶をたどる様に星空を見上げる美希。その言葉に俺は応える資格は無いと思つている。

そう、今日は7月7日。彼女にとつて祝いわむすいの日ひであつ弔じまついの日ひでもある。

「・・・ほとんど憶えていないんだが、感覚だけは残つているんだ。今でも時折、悪寒が止まらなくなる

俺は、独りで肩を抱きながら小さく震える美希の姿を、思い浮かべていた。彼女がどれだけの事を体験したのかは、皆にひた隠しにされてきたから、ほとんど知らない。

「全く、こんな私が家をまとめていて良いものか・・・。こんなに、臆病で弱い私が何故生き残ってしまったのか・・・。」「

だから、四年前にこので何があったのかは知らない。だが、彼女の哀しげに瞳の表情を見るとどうしても言葉が出てしまつ……。

「誰にでも嫌な事くらいあるわ、消してしまいたい記憶もある。でも、そんな中で強く在りつくる美希は、臆病じゃないと思つ

俺は、空になつた杯に酒を注ぎながら、俯いた美希の顔をのぞいていた。

「いや、私はそんな大層なモノじゃない。それからの二年間は皆にとてもいえない事をしてきたんだ……」

陰気な空気に耐えきれなくなつた俺はわざと明るい声で言つてやつた
「そんなん俺しらねーし、ずっと背負つてると肩こりだ

隣の顔を見たくないでそっぽを向きながら……

「だから時々、誰かに持つてもうえば良いんだ

「誰かに?」

「ああそうだ、何なら俺が背負つてやる

「…………」

美希は急に黙つてから数秒……。（とか、ふり向きびらこじやねーかつ……）

「……総真っ

「なんつ……」

答える前に美希は俺の背中に抱きつきながら静かに涙を流していた。
あんなに強い奴がこんなにも弱い。面白い矛盾だな。
俺はふり向くこともせず、しばらく彼女の泣き顔を見ないよう、碧

く輝く天の川を見ていた。
そら

「誕生日おめでとう、美希」

番外編 天の川（後書き）

時季が違ひ申し訳ありません。

初めて番外編を投稿させて頂きました。

なんかいつもと違つて、いきなり仲良くなつてる一人ですが

気にして下さい（泣）

これからも『空に響く歌声』をよろしくお願いします。

第拾漆話　日常と変化

空には大きな入道雲が浮かび、蝉の声がジリジリと暑さを補助し、太陽が青々とした木々の下にオアシスを作りだしていた。

昨日のことどが嘘の様に、巫女達がいつも通りに俺を見送る。

「・・・梅雨もあけたなあ」

季節は夏にさしかかる今日この頃、一週間後に控えた実技テストについてどうしようかと考えながら歩いていると、大きな古めかしい門の小さな扉から、これまた身長の低い女子が出てきた。

「おはよう、今日の天気は快晴ですね」

そしていきなり話しかけてきた・・・。

「そうかもしれないな」

「ところで、話は聞いていますか」

なんか、自然と一緒に登校するのが不自然すぎる。昨日までほとんど口も聞かずに無視してきたくせに、何考えてやがる。

総真は警戒心を持ちながら美希との話を続けた。

「話つて何だ？聞いてないぞ？」

「ツチ、あの平和ボケが今度あつたらどうしてくれよつかー！」

一瞬彼女が鬼のような形相になつた気がするが氣のせいといふことにしておこづ。

「とにかく、これから一週間お前に特訓を仕込んでやる」「はいはい！？」

「テストが近いからなあ、頼まれたんだよ」

「誰につ・・・・・親父か？」

意味深な笑みを浮かべる所からして、アタリだろう。

「理解できた？じゃあ、第1段階として、お前は私の組織に入つてもらひう」

「ついてけねーよ、んで組織つて何だ？」

「能力自警団“天組”そらぐみ」

胸を張つて言う美希についていけず、呆れた顔になつてゐる総真はため息をつきながら言った。

「・・・暴力団の間違いでは？」

今一番、裏社会で名をはせている集団、それが天組だ。巫女達の話にも良く出でくる。

「失礼ね、一応国が認める第二級警察組織つて事になつてるんだから」

「警察？んなわけ・・・」

「・・・あるんだなー」コレが、ちゃんと国から給料が出る

「世の中の税金をもつと他の所に使えよ」

「理あるわね」

頭を抱えて悩む総真をよそに納得している美希は学校より生き生きとしていた。

「と、言つわけで放課後天童家に集合だから

「はいはい、分かりましたよ」

よし、と『満悦になり急いで先を歩いていく彼女から鈴の音が聞こえる。ああそう言えばあの髪飾り前まで無かつたような気がする

・

総真はどこか遠くへ彼女が行つてしまつような錯覚にとらわれた

学校に着くといつものメンバー篠原 悠斗と勝田 駿太が待ちわびていたように俺に寄つてくる

篠「おはよう、総真くん」

勝「よひー・・・って言つかお前浮かない顔してゐるぞ」

総「はい?」

「そうだね、元気ないみたい」「さては・・・・」

ニヤリとする勝田を見て総真是ろくな事ではないと予見し、話を切り上げる。

こんな日常、昨日の放課後には考へていなかつた。

警戒態勢な巫女達。家に美希が入つてから周りが慌ただしくなつていたからか、疲れているのだろう、浮かない顔はたぶんそのせいだ。

美希の席を見ると彼女の姿がない・・・

総「おかしいな、先を歩いていつたはずなのに」

篠「へー、美希さんと道同じなんだ」

総「ああ、近所つちや近所だ」

勝「お前の近所は基本200m離れた近所だからな」

総「それは、俺の台詞では?」

勝「わりい、でも巫女さんと暮らせるんだる。『いやましーぜ』

脇腹に肘を当てる勝田、

(「のノリだと家に来るとか言い出しそうだな）

総「奴らは性格きついぞ・・・特に、愛想がない」

ちょうどいいのだが、京華はいきなりしゃみをしていた。「あれつ?
?風邪?」

第拾捌話 発表と始動

「あれ、転校生じゃん！？あんなに身長低かったんだ！」

「検査でいきなりAランクだつたんですよ」

「もう時の人だよね彼女」「それにしても美人だな」

周りの話には一切耳を傾げず、ただ平然と歩く姿はいつにも増して
凛々しい。

彼女は緊張感とそれ以上の希望を胸に抱き廊下を進んでいた。

ホームルームが始まりそうな時間になっていた。

「それにしても、美希さん来ませんね。登校中に何かあつたとか・・・

確かに篠原の言つとおり、この学校の生徒は超能力者が多いためか
事件に巻き込まれる例もざらにある。

「毎日定時に登校、規則正しいあいつが寝坊つて事もあるまいし」
現に俺は、朝登校してきたの見てるしな

「でも、姫さんならどんな事件に巻き込まれても、自力で解決しち
まいそうだな」

勝呂がそう言つと二人とも自分の席に戻つていった。

刹那、放送が流れる。

『えー、生徒諸君聞いてほしい』

生徒会長の声だった。3年5組 浅田 珠璃はAランク、成績首位

独占という記録を持つ、武士みたいな言い回しが特徴の女子生徒だ。

『今年も最初の実技テストが近づいてきている、能力者の諸君には
誠心誠意努力に励み、“できるだけ手加減”をしてほしい。なお、
今回のテストでは能力自警団天組の人材派遣指揮官殿が見学される

』ことなつた『

学校中がざわめく、裏の仕事を行つてゐるのは一部で、表では能力者担当の警察をしてゐる“天組”^{そらぐみ}は学生でもその能力に価値があると判断されれば、就職できるのだ。

『そこで、今日は野桐支部の組長殿がお見えになつてゐる。心して話を聞くよに』

『今回うちの人間がお邪魔することになつてしまつて、申し訳ありません』

(この声はっ！美希の家にいた銀髪女じやねーか)

総真は自分の教室を飛び出し放送室に向かつて走り出していた。廊下にも放送は流れ、話は続けられる。

『こちらの選別は、順位も関係なく平等にしていきたいと思つています。すぐに就職という形ではなく、あくまで本人の意見を尊重するよう心がけるので、ご安心下さい。なお、選ばれた中学生の皆様には“仮の部活動”として参加頂きます。私たちにとつて必要な人材が見つかることを祈願しております』

「着いた！」

勢いよくドアを開け・・・・られない！鍵がかかっている

放送室は防音だ扉をたたく音も彼女たちには聞こえない！

『かたじけない、生徒諸君これからも野桐中生という誇りを忘れず勉学に励んでほしい。これで放送を終了致す』

(銀髪女は天童家の使用人だ、美希がいない理由を知つてゐるはず！)

総真はこの時、気付かなかつた。何故こんな事をしてゐるのか、彼なぜ

女がいつも道理にいない、ただそれだけの事だったのに・・・そして自分が恐怖している事にも彼は気付いていなかつた。

開かれた扉の内側にいた人間を見て、彼はとても驚いた。

あける反動と共に彼女の額にはドアの角が当たつて同時に総真は倒れ込む。

誰か分からずには危險を察して、その倒れそうになる人物の頭をかろうじて右手で防ぐ

結果、見た目的に彼が美希を押し倒した様な状態になつていた

「これはっ、どういう冗談だ？」

「こっちが聞きたい、お前は何をしているのかしら？」

平然と答えるその姿は紛れもなく美希だ。しかし、その声は銀髪女のものだつた。

「不謹慎だな」

腕を組み総真を白い目で見る淺田会長はそう言つて扉を静かに閉じた

それと同時に美希はゆっくりと総真をどけて起きあがる

「あら、貴方も内心は人のこと言えないんじやないか？」

今度は一人の声が二重に聞こえてくる

「そのようなことは御座いません。この淺田、13歳の時分から美希様だけを見て参りました。それは、他の邪な感情より強い誓いであります」

陶酔しかけている珠璃を苦手な食べ物を押しつけられる子供の様な目で彼女は見る。

「・・・その言葉、他では口にしない方がいいと思つぞ」
次は美希の声、何だこいつは！？

「・・・誰なんだ？」

「その質問は何度か聞いた。もう答えるのにも飽きたぞ総真」

そう何度も聞いた、だが彼女の口から言葉を聞かなければ自分は信じられない

ソレは美希の声で、銀髪女の笑顔で、答えを紡ぐ

「妾はウラノスだ。お前の言う銀髪女でもあるが、今は天童美希と

言つておいたつぞ」

第拾玖話 少女と娘

「銀髪女でもあり天童美希もある」

自称ウラノスはそう語った。

その瞳は深い青か緑色、心なしか濁つて見える表情の無い眼が俺を見下す。

確かに銀髪女は美希にそっくりだった、ほとんど彼女の対として造られたような精密さは同一人物だと裏付けることが出来ない訳ではない。

ここは、能力者がゴロゴロ居るんだ、そんな能力あつたって不思議じゃない。

「どうやつたら、そんなことになるんだよ」

「ほう、妾の存在を否定しないとは・・・少しは成長したらしいな」

「否定？何の話だ？」

ウラノスは答えず後ろを向き脱力した顔をしながらそこにいる人物に話しかけた

「・・・珠璃、こいつ面倒だ。お前から話してやれ」

「かしこまりました。どの辺りまでで？」

「白兎が生まれた理由わけと天組のシステム辺りくらいで良いんじゃないか？」

「了解です。では天理総真くん話そうではないか、君は何が一番聞きたい？」

彼女に対する態度とはまるで違つ威厳のある会長の姿を見て、切り替えの早い人だと総真は思った。

「・・・まず、会長の正体から」

「私の事から聞いてくるのは意外だ」

「正体不明の人の話を信じられない性格なんで、俺」

「それは一理あるな、私は天組の学生達のまとめ役、この学校の立場と大差ない。学生はもちろん小中高様々だがそれら全てを率いるよう姫様に命令されている」

「何故、会長は美希に従う?」珠璃は言葉を詰まらせながら弱々しい声で話す

「…………助けられたから、君には関係の無いことだ」

「大体分かった。これから、俺は会長を信じることにする。銀髪女は何なんだ?」

「白兎と言った方が無難だな、表の世界では天風あまがさ 白唯しらゆいという名前がある。ウラノスの力を所持し、天童美希が存在するために生まれたモノだ」

「その白兎がウラノスなのか?」

「否ちがう、その力を受け継いだのは美希様本人といふことが証明されている。ところが数年前、力だけが暴走してしまったと聞いている。そうなると力に飲み込まれ、美希様が存在できなくなってしまうのだ」

「その時、対応策として無意識にもう一人の妾、つまり白兎を造りだしてしまったのだよ」

「それが、白兎の正体であり、美希様とウラノスの力を共有するもう一つの美希様だ」

「…………ややこしいだろ」

「ヤリと笑うウラノスは凜々しく勇ましい風格はあるが、幼さや悪いた戯ばらっぽさを感じるアンバランスな面影がある。

「じゃあ、俺は銀髪女は美希と考えて良いのか?」

「そもそも、お前の知っている天童美希は半分でしかない。今の妾

「何となく。結構慣れたけど頭が痛くなる話だな・・・」「まあ、一度にこんな事言われて信じろって方が無茶苦茶です」「そつか？」美希は首を傾げて口を挟む、頷きながら珠璃は続けた
「今まで知らずに日常を送ってきたのですから、ちゃんと考えてあげて下さい」

「アーティストの心」

「妻の中に居るが、そろそろ離れないといけない。いい証明ともな

たるや

ウラノスは見事な白銀の四枚の翼を広げると、双眼には紅い線が輝き出した。

すると、一人に見えていたモノが歪み始め、一つに分かれしていく。・・・

一つは銀色の髪の毛に黄金の目、左目紅い線が走る、常に笑顔でいる娘の姿に

——は生糸は似た黒髪は碧い瞳
右目を隠す前髪　表情のみえない
少女の姿に

「理解した？（しましたか？）」

少女は無表情で、娘は笑顔でそう言った。

「心配するのなぜ」か？」

和は三様のお祭りでござる。いかと専宗、主導権を握っている

「じゃあ、それなぜでもいい。美希はそれで良いのか?」

一別に構わないぞ、どうでも良い話だよ

美希がそう言つたとこでチャイムが鳴りはじめる。

「ホームルームが終わった様だ。生徒会長がサボつていては示しが付かないから、そろそろ私は失礼させてもらひよ」

「ああそうだ、放課後こいつを本部に案内及び天組についての説明を頼む」

すると会長は美希にかしづきハキハキとした声で告げる。

「美希様のお申し付けとあらば、我が身に変えてもその責務、果たして」「らんにいれましょうぞ」

「・・・なんか、旧家人みたいだな」「まあ一応はある武家の系譜の者だからな珠璃は」

早足で過ぎ去る珠璃を見送つてから一人並んで歩き出す

「つてか、身長は前の方が良かつたんじゃないかな?」

「五月蠅い!十歳の頃は周りより高かった!今でも少しは伸びてるんだからなつ!」

地団駄を踏む美希を見て、仕返しだ、と総真は含み笑いをしながら思うのだった。

第弐拾話 石碑と詩人

* 放課後 校舎正門前*

約束の時間きつかりに会長がやつてくる。

「姫様の言つたとおり君を案内させてもらひ。たぶんこれから、ほぼ毎日通う場所にもなるだらうからこの地図を渡しておこひう渡された地図?はノート一冊。パラパラとめくつてみると、見慣れた風景が絵となつて続いている。それが漫画の背景くらいのクオリティーで永遠と全ページに書き込まれていた。

「あの・・・これは?」

「生徒会の秘書に書かしたんだ。上手いだろ?

ドヤ顔で語る会長はさておき

「 - - - 秘書、おかしいって気付けよ!なんか、無駄に画力あるし。

「あ・・りが・・・とう御座います?」

わかりにくい地図をむらつくりはましだつたので、一応礼はしていました。

「天組そらぐみの支部なら基本的にはIDカードかパスワード、あと場所さえ知つていればどこへでも大体はいけるんだが、本部だと面倒で、その地図が最短ルートなんだ。付け加えると、姫様はおおむね本部におられる」

先程の地図といい、今の説明といい会長はやる気が空回りして方向性を間違つてしまつタイプだと推測できる。そんなことを考えながら、山の中を俺達は歩いていた。

緑生い茂る中、草を抜いてあるだけの山道は流石に辛い、やつと開けたと思つたら、その山の頂上に俺たちは降り立つていた。

「……」じつて、家の裏の山じゃないですか！」

今更気付くのもどうかと思うけどな

「裏？ああ君の家か、確かにそつでもある。しかし、結界があるから氣付かなかつたる」

またしても自信のありそうな笑みを浮かべ、胸を張つて会長は言つ。「ええ、気付きませんでしたよ！こんな所に訳の分からん石碑があるなんてねっ！」

見ると刀が七つ石碑を囲むように刺さつていて、なんか、意味あるのかアレ

「この石碑は有名で、伝説上の起源の場所とされていると鳥水先生から聞いた」

ようは、天子が最初に降り立つた場所って事なのか・・・

「そして、石碑の文章が読める者にだけ本部に入れる資格がある。姫様は3歳の頃にこれを見つけて、遊ぶ場所として使用していたらしい。文章の意味が人それぞれ異なっているため、君の素質があるかの試験でもあるんだ」

真面目な顔をして語られても困る、石碑に書いてある文字は見たこともない物ばかりだ。

同じ文章なのに人によって読み方が違うなんて、そんなものがあつて良いのか？

「・・・つまり、読めと」「ああそつだ」

「どうやつて？」「そんなものは、自分の感覚で見つけるんだな」石碑に向き合つてみるもの、何も浮かばない出でこない。五（+六）感をフル回転させながら総真は考えていた。

刹那、人影が真横にあるのに気付く、見上げようとするも、何か縛りのようなものをかけられて動かない。その重みは全身に及び総真是足を地面に着く状態で耐えるしかなかつた。

「…………體き円に踊らされ、紅き海に身を沈め
…………唄で紡ぐ言の葉は、届かざる詩人の詩
…………天に響く孤の叫び、聞きしものは一度と帰れぬ
…………移りゆく輪廻の中、あがき続ける者達は今何処

聞こえる声は知っている。唄つているのは誰かも解る。
声に反応するように石碑の文字の部分を光が滑る。

「……来ないんじやなかつたのか？」

「来ないなど私が言つたか？大体お前」とき、こんな試験を受けた
つて何にも出来ないくらい見えすいた事だ、バーカ」

本当に美希はタイミングが良いな。そしていつも俺より先を平然と
歩いてやがる。

「ハツ、俺だつてこのくらいできるさ」

「やつてみろ、と言いたいところだが、もういい、急ぐな。珠璃だ
つて丸々一ヶ月かかつたんだからな」

「……基準がわからん、美希はどの位かかつたんだ？」

「このシステムを作つたのは私だぞ？石碑は元々あつたが……小さかつたからな、憶えていないんだ」

「今でも小さいと思いますが？」 「うつさい、黙れ！」

見えはしないが今、美希が内心怒つてないのは何となく見当が付いた。

「美希、そろそろ術解いて欲しいんだけど……」

彼女の機嫌が悪いと一生このままになりそ่งなので、恐る恐る頼んでみる。

「それは私ではなく石碑のせいだ、どうしようもない。本部に着くまでそこで座つてろ」

「座つてたら、歩けないじゃないか」「馬鹿か、私は歩くと言つた憶えはないが?」

山に強風が吹き荒れ始める、カサカサと不気味に木は鳴き出し飛ばされてしまいそうだ。

一瞬体が浮いたと思つたら、いつの間にか何にもない真っ白な空間に三人は来ていた。

「ここどこだ?」「地面が無いのに足が着いている。

「本部、正確には創作異空間と呼ばれるものだ。必要とする場所や物を提供してくれる異空間とでも言えば理解してくれるかな?」

「用は、望めば叶う夢の楽園。ここで天組本部が欲しいと願えばそこに行ける」

美希が一步踏み出すと白かつた画面が花びらと化し舞い落ちる。そこは見覚えのある場所、大きな畳の座敷に座布団が幾つも並べてありどれも空席だ。右端と左端の場所だけ少し床が高くなっていた。あの時、つれて来られた部屋と同じ。

七年前の記憶が総真の中で渦巻いていた。

第3章話 歓迎会はしんみりと

「……」

あ然とする総真をみて、美希は首を傾げる。

「来たことあつたか？」

「いつ・・いや、何でもない」

本当は、来たことはある。俺の記憶はそう告げていた。忘れもしない、今やつと少しだけつながった。あの綺麗な女の子は絶対美希だ。じゃあ隣に座つてたのは美希の両親か？

でも、何で俺はあの時ここにつれて来られたんだ？

結論が出るとまた疑問が生まれる、そんなことを総真が繰り返しているうちに、現実では会長が解説を続けていた。

「ここは、天兎族が重要な会議をするために作られた場所を再現している。かつては実際にあつたのだが、一部焼失して使い物にならないのでこちらに移転している。真ん中の柱で各家の分家と共存している家柄の代表が分かれて座るのがしきたりだ」

会長の言つていることはほとんど耳に入つてこない

（こんな所に俺を連れてきて何がしたいんだよっ！美希！！）

混乱の中一人の少女を責め続けていると聞き慣れた声が反対側から聞こえてきた。

「おっ、美希ちゃんからご指名なんて嬉しいね」

気が付くと左端の席にはいつの間にか親父が座り、相変わらずの満面の笑みで（一種のポーカーフェイスもあるが・・・）俺を無視して彼女に話しかける。

「うつさい平和ボケ、息子が今から世に出るんだ。お前が見届けな

くてどうするんだ！？」

美希は顔をしかめてため息をつき、「相手をするのが面倒くさい」と周囲に視線で訴えかけていた。

「全く美希ちゃんはわがままだね、僕の苦労を無しにあるんだから」

そんなことにも気付かず（？）美希のカンに障りそうな暴言を吐く親父。だが、それに反応したのは本人ではなくその隣にいた会長だった。

「姫様がわがままだと！？ そう言つ貴方の方がわがまんなのでは？」
親父を睨みつけ声を荒げる会長、怒ると凄く怖いです。

殺氣立つてゐる会長は腰の後ろ辺りに手をかけ、そこからキラリと光る刃がのぞく、猪突猛進ぎみだ。たぶん、誰の言つこととも聞かないだろう……。

「珠璃、口を挟む話じやない。話がこじれると余計イライラするから止めてくれ」

それを見かねた美希が眉間に手をあて、ソフトに怒る様子に驚いた。案外優しい一面もあるらしい、俺は馬鹿（下級）扱いだけどな。

「……申し訳ありません」「いちいち構わない方が良いぞアレには」

会長にとつて美希の「う」ことは絶対のようだ。

黙つて下がる会長を見て、親父は更にこやかになった。

「部下に愛されてるね、美希ちゃんは」「挑発するな、マジで殴りたくなるから」

「言葉遣いが悪いよ、美希ちゃん当主なんだから」

「……親父、実はおもしろがってるだる」「やつぱ？ 気付いた？」
あははは、と総史郎は乾いた笑い声をもらす。この一人に凄い形相で睨み付けられて（会長は刀持ち出してるし）良く平気だな親父。

「さてと、総真は僕の隣の席かな？」の場合」

先程のことが無かつたかのように、総史郎は話し始めた。

「そうなるな。珠璃、今回お前が進行役になつて貰つぞ」「了解です」

話の流れ的に親父の横に置かれた座布団が俺の席つて事か・・・

「俺はどうすれば良いんだ？何か手伝うこと無いのか？」

小声で呟いた言葉を美希は即座に拾つて呆れたようにため息をついた。

「本当に馬鹿だな、今日はお前の自己紹介が目的で幹部連中集めるんだぞ？」

自分の席に座りながら珠璃は落ち着いて告げる。

「総真君、君が主役だ。手伝つも何も君のための会をこれから開くんだよ」

わからない、会議なんて言われても一度も出席したこと無い。

元々、そういうのは全部兄貴の仕事だったんだ。

「とりあえず、座ろうか。総真」

混乱し果てている助け船を出したのは親父だった。

「良いのか？総史郎」

「ああ、たぶん平気さ。僕の息子だもん」

「では、招集をお願いします」

それは一瞬の出来事だった。美希は一「ソッ」と無邪気に微笑み艶のある声で告げる

「わかった。珠璃、頑張りなさい」

悪寒にも似た感覚が全身を走る。滅多に見ないその笑顔は、俺に向けられたことは一度もない、前だつて桜姉さんに向けての笑みだった。会長はなぜか急速に赤面して顔を背ける。

美希の柏手は部屋全体に響き、Iの創作異空間を本当に揺りす。

「「来い」」

歪みが生じる空間で、総史郎と彼女は声を合わせ、反響する波が部屋の中央に大きな渦を作り出した。

両家当主の言葉で、一瞬のうちに空席に座るのは老若男女様々な代表者約2～30名。

親父の横の下の席に桜姉さんがいる、知つてゐる人はそれ位しかいない所為かだんだん不安感が募つてくる。周りを見渡すと右側の真ん中よりの席が一つ空いていた。

「董様が・・・」

バツが悪そうに言つて、美希は流すように告げる。

「言ひ忘れてたが、董は出張で国外だ、今回はそっちを優先するよう言つてある」

「じゃあ、全員だね良いんじゃないかな、淺田けやん」

総史郎の言葉を聞き、珠璃は深呼吸をして声を張り上げた。

「今回、進行役を天童家当主様より仰せつかつた学生部総長・淺田珠璃と申します、本日はお忙しい中、『足労頂き有り難うございます。議題は天理家の「子息クロノス様の一件について。なにとぞ急な話なので、大したお持て成しも滞らないこと深くお詫び申し上げます・・・・・』

丁寧な口調でスラスラとしゃべる会長を見て俺は感心の眼差しを向けた。

その時、会長に割り込むように威勢良く美希は言い放つ。

「自己紹介大会ー今日の内容はコレだー皆が死んだと思つたクロノ

スは生きていた。改めて初顔合わせと言うわけだ」

声のトーンがわざとらしい明るさだ、それも無表情だからなおおかしい。それを聞いた途端、ひそひそと皆喋り出した。

「どうかで聞いた話じゃのう」左側に座っていた老人が皮肉混じりに周りに言う。

「ホント、あんたが来たときも似たようなこと言われたよ?」

今度は30代くらいの綺麗な女性が右から。

「気にしないほうが良いんじゃないかな?そこはまた後田つて事で笑顔を作る事もせず、面倒くさそうに流す美希。ここで口を出したのは会長だ。

「姫様、進行役は私では?」

「・・・ごめん、次進めて」

美希はある程度明るく振る舞つているが、皆の空気は重い。親父でさえ笑顔がどことなく緊張しているようだ・・・

“喜ばしくない歓迎会”一言だとこんな感じだなたぶん。

「では、クロノス様を改めて紹介させて頂きます」

親父がさり気なく、一步出るように促したのに従う。ってか俺何言えば良いんだろ・・・

流れとはいえ、3割も理解していない総真は緊張と混乱の中、口を開く。

張り詰めた空氣は夏に似合わずつめたく刺されるように痛い。
誰もがその時を恐れて、戒めて、呪つて、祟つて、望んで、願つてきた。

そう、天子ウラノス、クロノスが一人世に出るということは天兎族にとつて開戦の証。

これから何があつても守り抜かなければいけない、皆の身の安寧と均衡のために・・・

しかし、数ある天子の歴史ものがたりの中でも彼らが不運に見舞われることは必然的な現象であり、それを乗り越えるケースはどこにも記されていないのだった。

第弐弐話 追憶は宝物

「お初にお目にかかります、天理家次男の天理 総真と申します以後お見知りおきを」

大半を美希が転校してきた時の自己紹介を引用した。これでちゃんとした挨拶のはずだ。

こんな、強そうな人たちに悪印象もたれたら災厄、こっちがボコボコにされかねない。

必死に周りを見渡してビクビク反応を伺つていると一人がこちらに寄ってきた。

「どれどれ、顔を見せてみな」「ふえ？」

一番最初に接触してきたのは、明るい栗毛色の短髪で腰には一つの日本刀を持つ女性。

「ふぬけた顔が総史郎そっくりだ。こいつがクロノスか？見るからに弱そうだな」

「この人は僕の幼なじみにあたる人だよ」

男勝りな勇ましさがあふれている女性は元気な笑顔を見せる。

「総史郎の方が若いのが癪しゃくにさわるがな」と一だヨロシク小僧

「えつ、親父より全然若く見える」

自然と口にしてしまつた言葉だが、与一は笑い声をあげ涙まで出している。そこまで面白かったか？と考えながら、少なくとも悪印象をこの人には持たれていないと安堵していた。

「なかなか、いい小僧だ。私は気に入つた」

・ · · · パキッ · · ·

音の方に目を向けると、珠璃の手元の扇子が真つ一つに割れている。

どうやら、与一の行動が腹立たしいようだ。怒りを必死に押さえながら珠璃は口を開く。

「与一様、次に進めても?」「ああ、構わない」

それに気付いた与一が凜々しい真面目な顔で俺の前から下がつた。

「クロノス様はどうかの誰かの所為で、なんにも自分の事を理解していないそうです」

強調して言つている会長に対して笑顔を返す親父。

「イヤミっぽく聞こえるなあ珠璃ちゃん。もしかして怒つてる?」

「当たり前です、こちら側として怒らない理由がどこにあるのですか」

半ば一方的な口喧嘩が始まろうとしたとき、美希は一人を無視して話を進め続けた。

「付け焼き刃でもいい、誰かこいつの面倒みてくれないか」

「・・・・・・・・」

一気に静まりかえった。はい、わかりました嫌なんですね。

「予想道理の反応だな、与一はさつき気に入つたとか言つてなかつたか?」

ニヤリと笑う美希はどことなく楽しそうだ。

「私は人に教えるのが苦手だ。説明とか面倒で困る」

「天童家現当主に剣術を教えたのは誰だったかな?」

美希のニヤリとした笑みは相手を追いつめて楽しむときの顔。彼女は今、少なからず上機嫌だ。

「ウラノスは戦っているだけで身に付いていつただろ。アレが人にできるとは到底思えないんだが」

「褒め言葉として受け取つておくよ。他にはいないのか?強者ぞろいな集会のはずなんだがな・・・」

「 - - - 私が」

桜の言葉を聞くと同時に美希は鋭く割り込んだ。

「貴様には任せない、ウラノスやクロノスを研究とやらに使うのはどうかと思つぞ」

「わしもその意見に賛同するが、問題が起こる可能性は消しておきたいからのう」

前に喋っていた老人が小さく発言した。美希は明らかに敵意をむき出しにしている。

刹那、バサバサと羽が擦れる音が近くから聞こえてきた。

「まあまあ、ウチ鳥水の桜をいじめないでやつてくださいよ」

黒髪に闇を映した様な瞳、黒い着物に黒い翼。女性と見間違うほど綺麗な顔立ちの優男。黒い印象が強烈で柔らかなテノールがよく似合っている男だ。

「カラスが何か用か?」

興味が無いといった様子な美希が無表情で言い返す。

「酷いな美希は、俺にはうすい つばき鳥水 椿つばきって名前があるんですけどね」

落ち着いた声で話すそいつは妙になれなれしい口調で言い返してきました。

「相変わらず女みたいな名前だな」

「しようがないじゃん、本家はそう言つ決まりなんだから」

「どうでもいい。ああそりいえば、椿は花を首から落とすって知つてた?」

彼を見据える美希はいつものように笑わない、冷たくガラスの破片を突き刺すように彼女は台詞を投げた。しかし、優男は鼻で笑う。

「美希の為だつたら首から落ちたつてほんせつ本望さ」

すました顔でキザな暴言を吐く彼は美希を見据えている。俺だつた

ら恥ずかしくて絶対言えない。余裕を見せる椿に美希は何も言わず無視を決めこんだ。

見計らつて、進行役は仕事をきつちりこなす。

「ハア、話がそれましたね、会議に戻ります。クロノス様の件は立候補者がいないということで、父親である総史郎様が任命する形となります。意見等御座いますか？」

「・・・・・」

「賛成と受け取らせて頂きます。では、総史郎様お願い致します」「うーんそーだねえ、与一は駄目なんでしょう・・・美希ちゃんはどう思う？」

「本人に聞かないんだな、まあいい。言いたいことは解った・・・私が面倒見れば良いんだろ？」

美希は、ため息混じりに横に置いてある脇息(きょうそく)にもたれ掛かる。親父はそれを見て更に笑顔を作った。

「では、結論を言い渡します。クロノス様は天童家の管理下におかれることになります。宜しいですか？クロノス様」

頷いてみせると、珠璃(すり)は安心したように胸をなで下ろす。

「では、お前は晴れて天組の仲間入りだ。学生枠だが、ついてこいよ？」

「・・・努力する」

目元の自然なほこりびと、儂げな口元。力強く頷く彼女は天使のようだ。

美希が初めて俺に見せたその笑顔は一生忘れる事は無かつた。

突然の来訪者に驚いて目を丸くする。

「お久しぶりです、兄様」

彼女はまだ5・6歳だというのに敬語で人と話をする。

「？、どうかされましたか？顔色が優れない様ですが・・・」

彼女にとつては当たり前なんだろうが、四つしか離れていない俺にまで使つてくるのは違和感を感じざるを得ない。

「・・・何でもない」

とりあえず、そう返したものの、彼女はまだ心配そうに俺を見つめている。無理して笑つていいのに気付いているのだろうか・・・

「きょうは何の用だ？」

「別に・・・」

ふてくされて、小さな頬をふくらます姿は誰もが愛おしく思つだろう。

「お父様もお母様も忙しいのは知つてるもん」

敬語が崩れてもなお、5歳とは思えない台詞を吐く。だが、言つていることが年相応かもしけない、用は我が儘はしたい事に変わりないのだ。

「だから、ここへ来たのか・・・ハア、勉強は？」

「終わってる。ねえ、宿題終わった？」

ならば、俺は変わりに聞いてやろうと思つ。

頷いて見せた瞬間、花が咲く様に笑顔が開花した。

「今日は何して遊ぶんだ？」

「空飛びたい・・・！」

控えめに咳きながら瞳は輝いている、豊かなその表情はその時だけ見せる俺の宝物だった。

第弐参話 前日は晴天なり

「こんな事もまだできないとは、君は日本男児なのかね？」

尻餅をついている俺を竹刀片手に罵倒するのは野桐中生徒会長、浅田珠璃だ。

今は朝6時頃、

俺は天組学生部という肩書きをあの会議でもらい、基本トレーニングとやらをやらされる羽田になる。それに会長は学生部総長でもあって、実質的な上司になりそれの上をゆく美希は社長クラスな訳で、俺に反抗の権利は皆無だった。

体力には少々自信があつたのだが、“基本”のレベルが学校とは天地の差だったのが想定外。たとえると、中高生の殴り合いと戦場の殺し合いぐらい話が違うのだ。しかし、俺のは会長直々にプログラムしたトレーニングの中でも最低クラスのものだと言うのだから、あの会議に居た人間の怪物じみた強さを改めて思い知る。

そして、その朝練をあの口から今日まで会長や京華に面倒見てもらつていて。今やっているのは『真剣（竹刀）白刃取』なんだが・・・。ただでさえ常人にはできなさそつな技なのに、能力者ともなると面倒なのがオマケ似つてくる。

説明すると、能力者の真剣白刃取は剣に能力をプラスされたモノを受け止める剣技だ。

たとえば、炎の能力者と戦った場合、剣だけ受け止めても能力が受け止められなかつた時は火傷、あるいは焼死体と化す。

反対に能力が受け止められても剣によって斬られてダメージを負う。

物理的に手で受け止め、能力を能力で跳ね返すのがこの技の難しい所だ。

反射神経の他に判断能力や計算の速さ等、色々気をつけなければならぬ。それも、相手と同じ力量で跳ね返さないとこの技は成立しないからで、天組の連中の半分以上はこれができるらしい。

今は物理的な面で失敗しても平氣なように竹刀を使ってやつていて、が、俺ができないのは能力の計算力。俺の場合、跳ね返しすぎて自分でダメージを負うタイプらしい。それに氣をつけても、今度は反射が遅れる不器用で、自分でも泣けてくる。

纖細さが伴うこの技は応用の幅が広い。だから、なんとしてもトーナメントまでに憶えるとの美希直々の命令は昨日のこと。社長

それに、当曰は明日だというのだから、彼女にはもう少し“普通”を知つて欲しい。まあ、彼女にとつてはこれが普通なんだろうけど。

- - - ビシッ

俺の腕に強烈な一打が降りかかる。しかし、今のは能力が使われていない。

「よそ見するなっ！全く・・・集中してくれ、君ができなきゃ怒られるのは私なんだぞ」

「時間がないのはわかっているんですけど、竹刀で無意味に殴るのは止めて頂けませんか？」

そして、会長はまた猪突猛進気味でスバルタに拍車がかかっている。今日は打撲で悩まされること決定だ。

「姫様も無茶をいつ。君が一日でこれをマスターできるわけないにな」

馬鹿にされてる気がするのはともかく、美希の事を言つときの妙に顔のほころびが目立つ人だ。

「こままでしよう、と汗を流すことなく、珠璃はすぐに別の部屋で着替え、ダッシュで学校へ向かった。今日はトーナメント前日、生徒会長はいつもより忙しい日になるだろう。

そんな会長の背中を見送りながらのんびりと着替えていると、背の小さい野桐中の制服を着た少女が入れ替わりにやってきた。

と思ったら、俺の近くまで来たらすぐ柱に隠れてしまった。

「遅い！早くしろっ！」

相変わらずの命令口調。学校では丁寧な敬語しか喋らないくせに・・・

美希は耳まで真っ赤になつて、いっぱいいっぱいの様子だ。

「どうした？何かあつた・・・かつ・・・・

ようやく気付いた。俺は、まだ制服の上を羽織つていない。

「『じつ・・・じめんっ！』

なに誤つてんだ俺？羞恥心の所為か頭が回らざる焦つている。

急ピッチで着替えをすまして、柱に隠れる少女の肩を軽くたたく。

すると、美希は小さく驚いた。

こいつは彼女らしくない小動物的な動きを見せる回数が最近増えてきている。

俺は微笑ましくその姿を見守っていた。

刹那、左から風の斬れる音が耳をかすめる。反射的に避けたが、足下に置かれた右脚には気付くことができず、からうじて受け身を取る。どうやら怪我は無いようだ。

「まだ“白刃取”できないのか

どうやら、俺が受け止められると仮定した上で技をかけていたらし

い。

だが、洒落にならない。美希の片手に握られているのは竹刀でも木刀でもなくバタフライナイフだ。

「殺す気かよっ！」

「ああそうだ、殺す氣で掛からなければ意味が無いだろ？」

こういふ台詞をさらりと言つてしまつところが美希の常人らしからぬ所だ。

「常に警戒は怠らない方が良い。だから、行動は素早くすべきだつ！」

遠回しすぎるが、彼女はつまり「着替えを見てしまつたのは私の所為ではない」と言いたい訳だ。

「そうかもな、氣をつけるよ。でも、右脚は余計じゃないか？」

「そもそも、未来視の能力を持つていらない者にとつては先手を打つ度、後手も考えておかないと偏る。何事もバランスが肝心だ。白刃取もそうだろ？」

意見すると論破される、最近コレばっかだ。

俺がこの小さな少女に勝てる日はいつ来るんだか・・・・。

「ん？ その不服そうな顔は・・・何かあったのか？」

「なんでもねーよっ！」

「そうか、ならば学校へ行こっつ」

解つてゐるようにニヤリと笑う美希は今日も上機嫌だ。

美希と毎日登校している訳ではない。こいつもこいつで忙しく、寝ている時間があるのかすら謎だ。

だから、ギリギリで学校に来ることがあるが、遅刻したことは一度もない。

その代わり、緊急の仕事で呼び出されて早退はショッちゅうしている。

それは過労で倒れそうな程の膨大な仕事の量、だから趣味もないに等しいらしい。自己主義的な性格でありながら自分に無関心。そんなような奴だとここ数日でわかつってきた。

教室に入ると、勝呂と篠川が顔を出す。

「お前、天組内定って話マジだつたんだな」

武闘家の一族な勝呂は軽く肩をたたいているつもりだろうが、朝の打撲の所為もあっていつもより痛い。本人も悪氣がある訳じゃないが、少々対応に困る。

「最近登録された天組、調べたら見つけたよ」

実は篠川も天組の端くれで野桐支部学生部のデータ管理をかじっている事を会長に聞かされた。この間の放送で天組と野桐中の結びつきは強固のものとなり、休み時間でも作業ができるようになつたと彼自身喜んでいた。

「データっても顔写真、無いんだな」

篠川のパソコン画面を見て勝呂がそう言つと、瞬間的に困った様な顔になり、また笑顔を取り戻す。

「う・・うんそんなんだ。IDがあるからいらなくなつたんだ」「でも盗まれたらやばいんじゃねーの？」

「ああ、そこは平気だよ。そもそも奪われる例は無に等しいし、詳しくは判らないけど本人しか使えないようになつてるらしいから」

「へー最近の技術はすげーな。んなことまで出来んのかよ」
感心している勝呂をよそに、篠川は目が泳いでいる、何かを警戒しているようだ。

どうしたのか聞いてみようと思つたんだが、こいつの身を危険にさらす行為になつてしまふ可能性もある。天組の仕事はそういう事も多いのだと会長から聞かされていたのでやめておいた。

「明日は実技初日だな」

一応フォローとして話題を変えてやると篠川は笑顔で無言の礼を言う。

「そうだね、僕は天童さんと会長の対決は見学しておきたいかな」

「でも、その二人は決勝まで対決しないはずだろ？」

「あの二人が負けないとと思うか？」

「いや、全く」

「だろ、まあ人より先に自分の心配した方が良いと思うけどな」

「うん、お互い大きな怪我の無いように気をつけよう」

「怪我をさせないようにだろ」

皆笑っているが、話している内容は中学生とは思えない。

しかし、それも常識になってしまえば変わらない。

何故かと疑問に思う者もおそらくはいなはずだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9003p/>

空に響く歌声

2011年11月29日19時55分発行